

第Ⅱ部 現代的テキストとしての『千夜一夜』

—文学における「範例性」のモデルとして

緒言——『千夜一夜』と文学研究

『千夜一夜』が文学研究の対象となったのは、19世紀のヨーロッパにおいてであった。18世紀初めにフランス人アントワーヌ・ガランによってヨーロッパへ初めて紹介され¹、たちまちのうちに湧き上がったこの物語集への（あるいはこの物語集を通じたアラブ世界の物語への）関心が、18世紀後半にはガラン版を補うテキスト群の探索というかたちをとり、それにまつわる書誌学的な情報の蓄積がおこなわれた。その土台の上で、19世紀に入るとアラビア語原典の印刷やその翻訳という活動を通じて初期の論考が積み重ねられてい

¹ *Les Mille et une Nuits, contes arabes*, traduits par Antoine Galland, 12vols. (vols.1-6 :1704, vol.7 :1706, vol.8 :1709, vols.9-10 :1712, vols.11-12 :1715).

く。とりわけイギリスを中心とする「オリエント」世界の支配の欲望と、それと平行して醸成されてくる人々（ヨーロッパの知識人および大衆）の中東世界への文化的関心が、『千夜一夜』を象徴的な素材へと押し上げた。そもそも学としての「文学研究」が制度化されてくるのは19世紀も末になってから（あるいは20世紀初頭）であろうが、『千夜一夜』は「文学研究」という学問領域が確立する前から、いわば先駆的に学究の対象となってきたことが興味深い。一つには、この“作品”——すなわち『千夜一夜』の名で呼ばれるものの総体であるが、それはつねに拡大し、またさまざまな変化をみせてきた——の書誌学的な混乱ゆえに考究作業が必然的に喚起されたからであり、また一つには中東世界に対する（植民地支配を背景にした）人類学的・民俗学的な関心の対象となることで文学作品でありながら他の学術的活動領域において参照素材とされてきたからである。こうしてフォン＝ハンマーJoseph von Hammer-Purgstallを代表とする書誌学的な研究や、他方では19世紀初めにエジプトに滞在しその知見を集積したアラブ民俗学の古典的著作『現代エジプトの習俗』²を出版したエドワード・レインによる、アラブ世界の生活と文化にかかわる詳細な注を施した『千夜一夜』の英訳本³が生まれ、また、広く中東世界への長い滞在を生かして、とくに性風俗に関心を置きながらやはりアラブ世界の生活文化情報を提供する膨大な注を施したリチャード・バートンの“完全版”英訳本が生み出された。バートンは彼の『千夜一夜』（別称『アラビアン・ナイト』）⁴の最終巻に長大な「巻末論文」Terminal Essayを付したことで、『千夜一夜』研究史のなかで重要な位置を占める。またバートンは単に1001夜を揃えた「完全版」のアラビア語印刷本を全訳しただけでなく、（本体に匹敵するほどとは言えないまでも）きわめて多数の、それまでなんらかのかたちで『千夜一夜』に帰属させられたことのある物語を網羅しようとした『補遺』6巻⁵を刊行した。「完全版」をさら

² Edward William Lane, *The Manners and Customs of the Modern Egyptians*, 1836 (邦訳、ウィリアム・レイン『エジプトの生活——古代と近代の奇妙な混淆』大場正史訳、桃源社、1964年)。

³ *The Thousand and One Nights, commonly called, in England, the Arabian Nights' Entertainments, a new translation from the Arabic, with copious notes by Edward William Lane, Author of "The Modern Egyptians," illustrated by many hundred engravings on wood, from the original designs of William Harvey*, London, vol.1: 1839, vol.2: 1840, vol.3: 1841. なお、この翻訳に付したレインの注からアラブ文化理解にかかわるもののみを集めて編纂された次の書物も、現在ではレインの主要な書物として参照されている——Lane, *Arabian Society in the Middle Ages, Studies from The Thousand and One Nights*, edited by Stanley Lane-Poole [1883], Curzon Press (London); Humanities Press (New Jersey), 1987.

⁴ *A Plain and literal translation of the Arabian nights' entertainments, now entitled The Book of the Thousand Nights and a Nights. With introduction, explanatory notes on the manners and customs of Moslem men and a terminal essay upon the history of the nights.* By Richard F. Burton, 10vols., 1885.

⁵ *Supplemental Nights to the book of Thousand and a Nights with notes anthropological and explanatory*, by Richard Burton, 6vols. 1886-1888.

に拡大し、より完成した物語集積たることを目指したこの『補遺』は、もとの完全版の完全性を脱構築すると言ってもよいまさにデリダ的な「代補」を象徴するものであり（いまや『千夜一夜』の中心をなす物語として人々の意識にのぼる「アリババと四十人の盗賊」や「アラジンと魔法のランプ」はこの補足部分に入るということを考えてみるとよい）、『千夜一夜』という物語集がいくらでも拡大することができ、その輪郭を捉えることが不可能であるような、原理的に言って謎の存在であることをむしろ明らかにしてしまったのだ。『千夜一夜』は「謎」ないしは「不可思議」な存在として、文学研究の対象となっていく。

19世紀後半から20世紀にかけての時期に、『千夜一夜』をめぐる本格的な学術研究が展開されるようになる。ゾタンベールによる諸写本の研究⁶、ショーヴァンの膨大な民話研究大全のなかでの『千夜一夜』関連文献の網羅的リストアップ⁷、ガランの日記の刊行⁸など、この「謎」の文学素材をめぐる、すでにきわめて高度な学術活動が繰り広げられてきた。これらはフランスでおこなわれた研究であり、イギリスでの中東世界に対する現実的関心に裏打ちされた習俗的な探索の方向と相補的に、フランスではより思弁的な「オリент学」の伝統のなかで、やはり今日でも参照され続けているこうした研究が生み出されてきたと概括できよう。

20世紀になると、オリент学をリードするイギリスのD・マクドナルドによる系譜学的・書誌学的な諸研究⁹や、学術的校訂として名高いドイツ語版の翻訳刊行¹⁰もおこなった

⁶ M. H. Zotenberg, « Notice sur quelques manuscrits des Mille et une nuits, et la traduction de Galland », in *Notice et extraits des manuscrits de la Bibliothèque nationale de Paris*, n°28, 1888, pp.167-320.

⁷ Victor Chauvin, *Bibliographie des ouvrages arabes ou relatifs aux arabes publiés dans l'Europe chrétienne de 1810-1885*, 12vols., 1892-1922, H. Vaillant-Carmanne (Liège); O. Harrassowitz (Leipzig), (vols.4-5 : Les Mille et une nuits,1900). 本論文の文献情報の多くもこのショーヴァンの書誌に依拠している。

⁸ « Journal parisien d'Antoine Galland (1708-1715), précédé de son autobiographie (1646-1715) », [présenté par H. Omont et Despréaux (Curé de Saint-Lazare)], in *Mémoires de la Société de l'Histoire de Paris et de l'Île-de-France*, tome XLVI, 1919, E. Champion, 1920.

⁹ Duncan B. MacDonald, "Maximilian Habicht and His Recension of the Thousand and One Nights", *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1909, pp.685-704; "Lost Manuscripts of the 'Arabian Nights' and a Projected Edition of that of Galland", *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1911, pp.219-221; "A Preliminary Classification of Some Mss. of the Arabian Nights", in *A Volume of Oriental Studies : Presented to Edward G. Browne on his 60th Birthday*, ed. by W. Arnold and Reynold A. Nicholson, Cambridge University Press, 1922, pp.304-321; "The Earlier History of the Arabian Nights", *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1924, pp.353-397. 以上を含め、マクドナルドは1900年以来『千夜一夜』関連では11本の論文を書いている。

¹⁰ Enno Littmann, *Die Erzählungen aus den Tausendundein Nächten*, 1921-1928 ; reprint in 6vols., 1953.

E・リットマンの総合的研究¹¹、N・エリセーエフによる書誌学的研究とテーマ論的考察を含む著作¹²、アメリカのシカゴ大学のN・アボット教授による最古の写本断片の発見¹³、ドイツのM・ゲルハルトによる物語テキストとしての詳細な研究¹⁴など、著名なもののほかにも、民話学的研究、ヨーロッパでの受容研究、韻律論的研究などさまざまな学術研究が積み重ねられていく。こうした流れのなかで、日本でも『千夜一夜』を単なるおとぎ話集としてではなく、学問的関心をもって、あるいは少なくともまじめに検討するだけの価値のある文学作品として受けとろうとする姿勢が醸成され、前嶋信次とその後を継いだ池田修によるアラビア語原典からの初の邦訳が平凡社から東洋文庫の一作品として刊行されることになった¹⁵。

2004年のガランの翻訳刊行開始300年を記念して、世界各地で『千夜一夜』関連のシンポジウムがおこなわれ、研究論文も多く生みだされた¹⁶。マルゾロフ監修による信頼に足る学術性と可能なかぎりでの網羅性を備えた『アラビアンナイト百科事典』（2巻本）¹⁷が刊行されたことも画期的である。日本では西尾哲夫の指揮によって研究が集積される一方¹⁸、その監修のもとに「アラビアンナイト展」¹⁹が開かれ、充実したカタログ²⁰とともに、『千夜一夜』を再発見されるべき文化現象として提示した。その西尾の『アラビアンナイト——文明のはざまに生まれた物語』が岩波新書として最近刊行されたばかりである²¹。

『千夜一夜』を学術研究の対象としてきたのはヨーロッパであるが、近年ではそれがア

¹¹ Littmann, *Tausendundeine Nacht in der arabischen Literatur*, Mohr (Tübingen), 1923.

¹² Nikita Elisséeff, *Thèmes et motifs des Mille et Une Nuits : essai de classification*, Institut Français de Damas (Beyrouth), 1949.

¹³ Nabia Abbott, "A Ninth-Century Fragment of the 'Thousand Nights': New Lights on the early history of the Arabian Nights", *Journal of Near Eastern Studies*, no. 8, 1949, pp.129-164.

¹⁴ Mia Gerhardt, *The Art of Story-Telling : a Literary Study of the Thousand and one Nights*, E. J. Brill, 1963.

¹⁵ 前嶋信次・池田修訳『アラビアン・ナイト』、東洋文庫、平凡社、全18巻および別巻1、1976-1992年。

¹⁶ その代表的な成果に、2004年5月にパリで5日間にわたっておこなわれたシンポジウムの記録で、35本の論文を収めた以下の論集がある——Aboubakr Chraïbi dir., *Les Mille et Une Nuits en partage*, Actes Sud, 2004.

¹⁷ Ulrich Marzolph & Richard van Leeuwen ed., *The Arabian Nights Encyclopedia*, 2 vols., ABC-Clio, 2004. 本論文では、以下において、*The Arabian Nights Encyclopedia* とのみ表記する。

¹⁸ その成果として、2002年に大阪（国立民族学博物館）でおこなわれた国際シンポジウムをもとにした以下の論集がある——Yuriko Yamanaka and Tetsuo Nishio eds., Introduction by Robert Irwin, *The Arabian Nights and Orientalism, Perspectives from East and West*, I. B. Tauris, 2006.

¹⁹ 「アラビアンナイト大博覧会」2004年9月9日～12月7日、国立民族学博物館。その後各地を巡回。

²⁰ 国立民族学博物館編・西尾哲夫責任編集『アラビアンナイト博物館』東方出版、2004年。

²¹ 西尾哲夫『アラビアンナイト——文明のはざまに生まれた物語』、岩波新書、岩波書店、2007年。

ラブ世界にも広がりつつあるのが特徴である。とりわけ、欧米の諸大学で文学研究に携わるアラブ世界出身の多くの研究者が、語学的・文化的なメリットを活かして、熱心に『千夜一夜』研究を展開している。ガランが依拠した写本を探し出し、その（アラビア語）校訂版を刊行したマフディはその先駆的の代表者である。マフディはこのガラン写本の印刷刊行のみならず、本論文も多く依拠するさまざまな学術的研究によって『千夜一夜』学を大きく進歩させた。今日では欧米においてばかりでなく、欧米での留学を終えてアラブ世界で『千夜一夜』研究を続ける専門家も現われ始め、カイロの学院（アメリカン・ユニヴァーシティ）を一つの拠点として重要な成果を挙げつつある。今後、中東世界で『千夜一夜』の新たな写本が発見されることも大いに期待される。

このようにみえてくると『千夜一夜』研究は、「文学研究」が始まる以前から開始されていたが、現在、まだ始まったばかりであるとも言えるように思われる。すなわち、『千夜一夜』の研究は、『千夜一夜』という作品が、ヨーロッパ近代的な「文学」概念に従うものでないだけに、「文学」研究という枠を初めからはみ出すような素材として探究されてきたのであり、また今日「文学研究」という分野を超えた影響力をもつと同時に、私たちにとってすでに制度化している「文学」の研究そのものを問い直す契機としても働くと思われるのである。

本論文では以下の第Ⅱ部において、『千夜一夜』が今日もつ触発力について検討していきたい。第Ⅰ部を通じてデリダの考えた「範例性」という概念を多面的にたどってきた本論文としては、『千夜一夜』がどのようなかたちでこの「範例性」を具現した作品としてあるのかを明らかにすること、そしてこの特質が私たち読者にとってどのような意義をもつのかを示すことをめざす。すなわち『千夜一夜』が、「いま」のそして「これから」の私たちにとって、どのような力を有するものであるのかを照らし出したい。

以下、第4章では『千夜一夜』の特異な生成過程を、第5章では『千夜一夜』のテキストに内在する特異性を採りあげ、この「作品」が私たちの通常の「作品」という概念を打ち壊し、まさにデリダがたえず主張していたような、「起源」なき存在、内部と外部の分割そのものが脱構築される越境的な場として存立していることを明らかにする。第6章では、デリダによる存在概念の根幹をなしていた「反復可能性 *itérabilité*」がまさに『千夜一夜』のテキスト構成原理となっていることを示す。第7章では、『千夜一夜』の「語り」が、単一の主体という概念を打ち壊し他者論的な主体ないしは間主体的な主体（さらに言い換えれば「範例的」な主体）を実現するべく、特異な形でなされていることを明らかにする。第8章では、『千夜一夜』にみられる特殊な主人公像に着目して、非主体的で受動的であり、さらには「非＝知」を根幹に据えるような存在であることがこの物語では主人公たる要件をなしていること、その背景にはイスラーム神学で哲学的に堅持されてきた非実体論

的な世界観があること、そしてその結果、凡庸で無知な主人公たち、つまりは匿名的で無力な私たち人間の誰もが、生き生きとした存在者として光を放ちうとする人間肯定の姿勢がここから生まれてくることを示す。まとめにおいては、第Ⅱ部全体をふりかえって、結章への導きとしたい。

なお本論文では『千夜一夜』の収録話名としては、おおむね平凡社東洋文庫版での表記を用いる（翻訳上の表記のゆれもそのまま踏襲した）。ただし随時、通称として用いられている物語名も併用する。また、言及する物語が、1001夜のどのあたりに配置された収録話であるのかのめやすのために、平凡社東洋文庫版での構成にしたがって各収録話に通し番号を付し、これを収録話名に冠して掲げることとする。平凡社東洋文庫版のタイトル一覧は、巻末資料1を参照されたい。これから議論するように、『千夜一夜』という切れ目のない壮大な物語テキストにおいては、収録話一つ一つの輪郭があいまいで、その“アイデンティティ”もつねに揺れ動き、もともとはタイトルというものも伴っていない。したがって、上記のような方策をとることは、『千夜一夜』のある一つのヴァージョンを不当に特権化した上で、各収録話を完全に独立した物語であるかのように処理するという点で、本論文が『千夜一夜』という作品の本質とみなす不定形で境界横断的なあり方を裏切ることになっていることは承知しておかなくてはならない。しかしながら研究上は、便宜的にこうした処理をおこなわざるをえないことを断っておきたい。

この意味でも『千夜一夜』は、それに接しようとする者に、必然的にこの作品に対する「裏切り」を引き起こすような装置だと言うことができる。『千夜一夜』は、「裏切り」による「継承」しかありえないような素材、すなわちデリダの考える「文学」そのものの象徴的な素材であると、すでに言うことができそうである。

第4章 『千夜一夜』の生成過程と本質的可変性

はじめに——輪郭のない作品

私たちはふつう「作品」というものを、輪郭をもったひとつの実体としてイメージしている。二十世紀の文学批評の興隆期にめざましい成果を挙げた作品の構造分析や内在批評の潮流はとりわけ、そうしたイメージを強化することになった。しかし私たちが固定したものであるはずだと考えている「作品」の「輪郭」とは、もっと問題を孕んだ、実は決定不能なものではないのだろうか。まさに『千夜一夜』という「作品」はこうした問題意識に照らしてみたとき、挑発的な作品となる。

第1節 作品の生成過程

近代西欧の美学的な常識では、「作品」は「完成」することによって初めて存在するとされてきたと言えよう。この意味では『千夜一夜』は「作品」とは呼べないことになる。なぜならこの物語集は、最終的で決定的なかたちをとって「完成」したことがないからである。この決定版の不在のありあさまをこれからみることになるが、この終着点の不在（ないし不決定）と照応して、『千夜一夜』には「起源」もない。『千夜一夜』という作品は「起源」という概念とまったく相容れないような場である。本節では、『千夜一夜』における「起源」と終着点の不可能性を、この「作品」の生成過程を再検討しながら確認したい。

最初に『千夜一夜』の成立過程を概観しておきたい。本論文では『千夜一夜』の生成発展段階を大きく三つの時期に区切って考えることにする。第1期は、アラブ世界に導入される以前の時期である。第2期は、8世紀以降の中世アラブ世界での発展期である。そして第3期は、18世紀初めにガランによってヨーロッパに紹介された後、現代に至るまでの時期である（巻末資料2『千夜一夜』生成過程略年表参照）¹。

¹ なお、A・シュライビは最近の文章で、次の5つの時期を設定しているが、原理的というよりは羅列的な区分である。1. 8世紀末から9世紀初め：ペルシア語からアラビア語へ翻訳さ

通常は、第2期こそ『千夜一夜』の時代として指定されるものであろう。しかしこの物語集はアラブ世界で初めて出現したものではなく、これから確認するようによそからの借り受け、ないしは移入によって始まったものであり、上に第1期として設けたように少なくとも前史が存在する。むろん中世アラブ世界のイラクで、シリアで、カイロで、『千夜一夜』は盛んに楽しまれ、伝承され、発展をみてきた（トルコやペルシアでもかなり盛んであった痕跡が伺える）。だが『千夜一夜』の発展はこの段階で終わるのではない。1704年に始めてフランス語訳が刊行されてヨーロッパに紹介され、それが大ブームをまき起こしたことによっていわば今日の『千夜一夜』はある。したがってヨーロッパ紹介後を『千夜一夜』の後日談とみるのではなく、この第3期もまた『千夜一夜』の新たな生成期ととらえるべきであろう。実際、現在の定本となる写本が編まれたのは、あとでもみるが18世紀後半のカイロのことであり、これは当然ヨーロッパでの『千夜一夜』熱を反映してのことである。そしてこの段階に入って以後、世界中の人が『千夜一夜』を読み、またその新たな変貌に参入することになった。いまなおその現象は続いている。『千夜一夜』の生成運動には、まさに始まりも終わりもない。

1) 「起源」の不在

『千夜一夜』はその成立時期を特定することができない。なぜならこの作品は上に触れたように、たえざる変貌のなかにあったからである。

『千夜一夜』は、ペルシアで成立していた物語集をアラビア語に翻訳することによってアラブ世界に導入されたものであるらしい。西暦990年頃没したとされるバグダードの書籍商のイブン・アンナディームが当時の全書籍の目録を作成した際に残した記述（『キターブ・アル・フィフリスト（目録の書）』と呼ばれる）のなかに、この物語集について言及したと思しき箇所（第8部第8章第1節）があり、そこからこうした事情をうかがうことができる²。それによれば空想的な娯楽物語の流行のもとにはササーン朝のペルシアであり、その元祖（「こうした内容で一番最初に書かれた本」³）に『ハザール・アフサーン（千物語）』

れた時期。2. 9世紀から17世紀：数々の物語を付け加えて発展し、いくつもの物語集が作られた時期。3. 18世紀：ガランの翻訳が刊行され、その影響が広がった時期。4. 19世紀：アラブ世界で『千夜一夜』が見直され、ヨーロッパで新たな翻訳が多数出現して新たな影響が拡大した時期。5. 20世紀初頭から：映画などさまざまなジャンルに『千夜一夜』の表象が広がり、新たな文学創作への影響もみられるようになってきた時期。Aboubakr Chraïbi, « Introduction », in A. Chraïbi dir., *Les Mille et Une Nuits en partage*, Actes sud, 2004, pp.12-13.

² Cf. *The Fihrist of al-Nadīm, A Tenth-Century Survey of Muslim Culture*, ed. and translated by Bayard Dodge, Columbia University Press, 1970, 2vols. 『千夜一夜』に関連する記述は、「おとぎ話 fable」の項目のなかで出てくる。p.712sq.

³ *Ibid.*, vol.2, p.713.

という書物があった。女性を娶っては翌朝に殺すことを繰り返していた王のもとに聡明な女性シャフラザードが嫁ぎ、千夜のあいだ物語を語り継いで（その間に一児の男子をもうけ）、ついに王に改心させたという枠組みをもっていることが紹介されている。ここで言及されているのはまさしく『千夜一夜』の原型にほかならない。またマスウーディ（896-956）の歴史物語書『黄金の牧場』⁴のなかにも、『ハザール・アフサーネ』というペルシアの物語集がアラビア語に訳されて『アルフ・フラーファ（千の〔娯楽〕物語）』となったという記述があり⁵、イブン・アンナディームの情報とほぼ一致している。

アッバース朝の成都バグダードでは、ペルシア語やギリシア語をはじめさまざまな言語からの翻訳が盛んであったことが知られている⁶。こうした事情から、アラビア語の物語集『千夜一夜』は、八世紀初頭のバグダードでペルシア語の物語集をアラビア語に翻訳するかたちで始まったと考えられている。最初は、もとの物語集の名をアラビア語にほぼ直訳して『千の物語（アルフ・フラーファ）』と呼ばれていたのが、次第に『千の夜（アルフ・ライラ）』と名を変え、そのうちに『千夜一夜（アルフ・ライラ・ワ・ライラ）』という名称に落ち着いてきたのだと考えられている⁷。ちなみに現存する最古のテキストは、シカゴ大学のナビア・アボット教授が 20 世紀のなかばにエジプトのパピルス文書の間から発見した、二枚の二つ折りの紙（亜麻紙）に書かれたもので、欄外の記述から 9 世紀のものだと確定されている。わずかな断片であり、脱色し破損しているが、奇蹟的にも『千夜一夜』の枠物語冒頭部を記したもので、しかも幸運なことにタイトルをはっきりと読み取ることができる。⁸

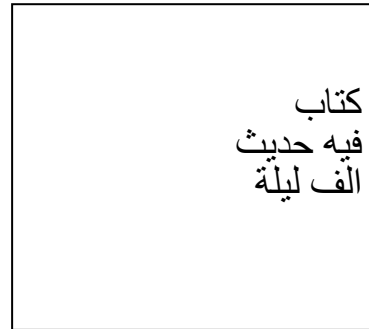
⁴ 10 世紀（943 年生まれ）のバグダードで活躍した著名な博物学者・歴史学者の『黄金の牧場と宝石の鉱山（ムルージュ・アッ＝ザハブ・ワ・マアーディン・アル＝ジャワーヒル *Murūj al-Dhahab wa Ma'adin al-Jawāhir*）』。この著作は一種の百科事典で、当時知られていたさまざまな情報が記述されている。

⁵ フォン＝ハンマーが 19 世紀初めに発見。『黄金の牧場』をすでに 1805 年に翻訳していたフォン＝ハンマーは、さらにこの書物の写本をローマやコンスタンチノーブルで確認して、1827 年の論文で当該箇所のアラビア語テキストとその仏訳を紹介している。Cf. J. de von Hammer, « Sur l'origine des Mille et une Nuits », *Journal asiatique*, vol. 10, 1827, pp.253-256.

⁶ ディミトリ・グタス『ギリシア思想とアラビア文化——初期アッバース朝の翻訳運動』、山本啓二訳、勁草書房、2002 年、参照。

⁷ 12 世紀カイロの貸本屋の記録には『千夜一夜』の項目がみられる。なお「1001」という数字は、無限ないしは非常に多い数をあらわすものとして一般的だったとされている。この表現がトルコ語に由来するものだという説もある。

⁸ Nabia Abbott, “A Ninth-Century Fragment of the ‘Thousand Nights’: New Lights on the early history of the Arabian Nights”, *Journal of Near Eastern Studies*, no. 8, 1949, pp.129-164.



- (左) 9世紀の写本断片第1ページ (アボットの論文から)
シカゴ大学東洋研究所保存
- (右) タイトルの部分を抜書きしたもの
「千夜の物語^{ハディース}の書」と記されている。

ではこの物語集の起源をペルシアだと限定してよいかというと、そういうわけにもいかない。もともと、才女が物語を語り継いで延命するというモチーフはインドのものだとされている。それがペルシアに渡っても人々に受け入れられて粹物語に生かされたらしい。そもそも入れ子式の粹物語のスタイルそのものが、『パンチャタントラ』⁹や『鸚鵡七十話』¹⁰などに代表されるように古代インド説話に特徴的にみられるものである。このようにペルシアで成立していた物語集自体が、インドなど周囲の物語伝統の移入と継承に基づくものであったことは疑いを得ない。また、アラブ世界に移入された愉快なおとぎ話(フラーフア)の出所としては、さきのイブン・アンナディームもマスウーディも、ペルシアとインドに並んでギリシアを挙げている。ギリシア語で語られてきた物語も、この伝統の重要な一角を形成している。古代ギリシア世界(ならびにローマ世界)の物語要素が伝播してのちのちまで中東世界でも広く受け継がれてきたことは、現在の『千夜一夜』の諸テキストをみれば明らかであるが、おそらくごく初期の形態においても同様の側面があったであろう。イブン・アンナディームはそもそも慰みにおとぎ話を楽しんだ最初の人物はアレクサンダー大王だと述べ、このタイプの物語の伝統がギリシア世界と切り離せないことを示していたし、彼の『フィフリスト』の少しさきの箇所には、ビザンチンの物語として「シャフリヤール王と、王が語り手シャハラザードと結婚するにいたったわけ」という書名が挙げられている(「夜話、歴史、おとぎ話、ことわざについてのビザンチンの書籍名」の項目¹¹)。こうしたことからすれば『千夜一夜』の起源をギリシア世界の方へ伸ばすこと

⁹ 邦訳としては、『アジアの民話 12 パンチャタントラ』田中於菟弥・上村勝彦訳、大日本絵画、1980年。

¹⁰ 邦訳としては、『鸚鵡七十話 インド風流譚』田中於菟弥訳、東洋文庫、平凡社、1963年。

¹¹ *The Fihrist of al-Nadīm*, p.718. また、ロバート・アーウィン『必携アラビアン・ナイト—物語の迷宮へ』西尾哲夫訳、平凡社、1998年、p.103を参照。

も理がないわけではない。いずれにしても8世紀あたりまでのアジアからヨーロッパへかけての地域における物語の伝播・交流は、私たちが考える以上にきわめて活発であり、個々の物語を採りあげた場合でもその「起源」の場所と時代を特定することはほとんど不可能であるように思われる。以上のしだいで、『千夜一夜』の起源を確定しようとしても、それはどこまでも遠い時代へと、しかも複数のさまざまな場所へと拡散してしまうために、発端を突き詰めることは不可能であることがすぐに明らかとなる。

したがってヨーロッパ世界で『アラビアン・ナイト』*Arabian Nights*と称されるこの物語集は¹²、その原型の由来からすれば、アラブ世界のものではない。モチーフからしてもアラブ世界では「アラビア語を着たペルシア文学」と呼ばれることがあるほどで、井筒俊彦も『千夜一夜』は真に正統的なアラビア文学ではない。それはアラビア語の外衣を着たインドとペルシアの物語文学にすぎない」と述べている¹³。外部性の強さについての価値判断はともあれ、『千夜一夜』はアラブ人にとって（ある面では）アラブ世界の内部には起源をもたないものとして意識されてきたのであり、たしかにそうした性質を本質的に備えている。『千夜一夜』は本質的に「よそailleurs」の文学なのである。

『千夜一夜』の成立については、辞書にもしばしば16世紀初めまでにカイロでなされたと記されている。たとえば『千夜一夜』研究の日本での第一人者である前嶋信次にしても、文学辞典のなかで次のような記述をおこなっている。「最後の仕上げはカイロで行われ、そのマムルーク朝が十六世紀初めにオスマン・トルコ帝国に征服された頃には、もはや大体、現在のような形を整えていたらしいというのが、最も有力な説である」¹⁴。さらにごく最近でも「各地の説話を取り込みながらバグダッドやカイロで内容が発展し、15世紀ごろ今に伝わる形になった。」¹⁵とほとんど自明の事実であるかのごとく報道されている。

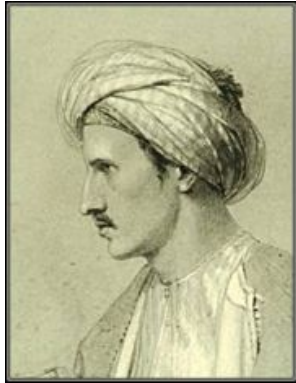
¹² 『千夜一夜』を最初に『アラビアン・ナイト』*Arabian Nights*と称したのは、1706年にイギリスで出版された英訳書*Arabian Nights' Entertainment*である。ガランによる仏訳開始の2年後のことである。なお西尾によれば、この書物は、オランダで出版されたガラン訳の海賊版に基づいているという。イギリスでは以後、この作品は『アラビアン・ナイト』という題名のもとに流布し続け、『千夜一夜』ないし『千一夜』（英語では*One Thousand and a Nights*）という題名が（付随的にせよ）用いられるようになるのは19世紀に入ってからである（Cf. 西尾『アラビアン・ナイト』p.70）。こうした事情から英語圏では『千夜一夜』という名称のほうが別称のように認識され、『アラビアン・ナイト』というタイトルをほぼ公式のものとするという慣習が形成されてきたわけである。

¹³ 井筒俊彦『イスラーム生誕』（1979）、改版、中公文庫、中央公論新社、2003年、pp.46-47。

¹⁴ 「アラビアン・ナイト」の項、『新潮世界文学辞典』、1990年、p.37。さらに辞典巻末の年表でも『アラビアン・ナイト』は1100年のところに、「この頃成立」と記されていて、「成立」という語が意味するものがきわめて曖昧である。

¹⁵ 2004年7月17日「ことばの旅人」欄掲載の「千夜一夜物語」の記事（『朝日新聞』2004年7月17日（土）朝刊（別刊）be on Saturday, pp.1-2の『千夜一夜』の出版データ。

これは実は『千夜一夜』の英訳者エドワード・レイン Edward William Lane (1801-1876) の説の踏襲にすぎない。レインは彼の翻訳版の序文で、「今のかたち」での『千夜一夜』は、「15 世紀の最後の四半世紀になってから作り始められ、1517 年のオスマン・トルコによるエジプトの征服以前に完成されていた」と主張している¹⁶。だが、レイン自身「私が考



えるにおそらく」と前置きしているように、この説はレインの主観的な主張でしかない。19 世紀前半のカイロに数年間住み¹⁷、その地に密着した生活を送りつつ風俗を研究して、(それが中世アラブ世界の文化のありようをそのまま保存しているとの価値づけを込めながら) 著書『現代エジプト人の習俗』を記し¹⁸、アラブ民俗文化の真髄をヨーロッパに伝える第一級の専門家の立場を獲得したレインとしては、彼が訳して伝える『千夜一夜』は、「純粋な」アラブ世界に属するものでなくてはならなかった

【図版はアラブ衣装をまとったレインの肖像画】。だから彼にとっては『千夜一夜』がヨーロッパの影響を受ける以前に、それどころかトルコの支配にエジプトのマムルーク朝が屈する以前に、アラブ=イスラーム世界の黄金の中心地であるカイロで完成されていることが必要だった。すなわち時期的にはこのカイロ陥落の直前に、すなわちカイロで華開いた中世アラブ文化の最終段階に完成をみた最高の果実として位置づけられることが重要であったのだ。なお、レインも、また上記の辞書類等の記述も、おそくとも 16 世紀までにシリアで完成をみていたと推察されるいわゆる「シリア系」写本（冒頭から約 200 夜あたりまでのみを含む、ほぼ安定した構成の諸写本）を問題にしているのではないことは、「カイロでの完成」が言及されていることや、知られている「今のかたち」というのが 1001 夜をそなえたヴァージョンを念頭においているだろうことを考えれば、明らかである。レインが彼の翻訳の底本としたのも 1001 夜を備える「エジプト系」写本にもとづくヴァージョン（「ブーラク版」と呼ばれるアラビア語印刷本）である。

上記の辞書類での記述とは異なって、これからみるように、古来『千夜一夜』は何度でも作り変えられてきたのだし、とりわけ「今知られているかたち」での『千夜一夜』というしばしば使われる表現がこれから言及する ZER（「ゾタンベールのエジプト系版本」）を指すのであれば、その親写本の成立は 18 世紀末とされている。しかも、マフディの言う

¹⁶ Edward William Lane, *The Thousand and One Nights* (1839-41), Chatto and Windus (London), 1889, vol.1, p.viii.

¹⁷ 最初のエジプト旅行・カイロ滞在は 1825 年から 1828 年。出版社の支援を受けた二度目のカイロ滞在は 1835 年から 1836 年。

¹⁸ Lane, *The Manners and Customs of the Modern Egyptians*, 1836 (邦訳、ウィリアム・レイン『エジプトの生活——古代と近代の奇妙な混淆』大場正史訳、桃源社、1964 年)。

ように、ZERの親写本は次々にコピーされてヨーロッパ人の手元に渡り、現在ヨーロッパのあちこちの図書館に所蔵されてはいるが、逆にアラブ諸国ではひとつも見当たらないということから推し量れば、もともとZERの親写本はヨーロッパ人の依頼に応じて作られたと考えるのも妥当であるように思われる¹⁹。さらにはレインが翻訳の底本とした1835年のブーラク版は、エジプト人たちの手によって印刷されたとはいっても、1789年のナポレオンの遠征以来、近代国家として成長することをめざした官僚エリートたちの教養（ないしは楽しみ）——本論文ではこれから述べるように自文化意識の変革としてみたいのだが——のために生産されたと考えられている（ヨーロッパ向けの輸出商品としての意向があったとする見方もある）²⁰。ともかく自分たちの文化遺産として誇りを抱き、この国立印刷所のもっとも早い出版物の一つとして『千夜一夜』が選ばれたことは、『千夜一夜』がアラブ文化の代表作品とみなされたことを意味するが、そもそも、アラブ世界の内部では（ごく最近であっても）まともな文学とはみなされなかった馬鹿げたおとぎ話集である『千夜一夜』を、自分たちの文化的アイデンティティの拠り所とみなすこと自体が、すでにヨーロッパの価値判断に寄り添ったものである。こうした事情をかながみれば、『千夜一夜』は、純粋にアラブ世界の内部で発展しその意味でアラブ文化を代表する作品ではないと言うことができるだろう。さまざまな他所の起源を持ち、またアラブ世界で民衆に親しまれ発展してきたにしても、そこに西欧世界との往還を交えることで、『千夜一夜』は現在のかたちに作りなされてきたということを強く意識しておきたい²¹。この点で本論文は、世界文学として『千夜一夜』を捉えるF・ガズル²²や、「文明のはざまに成立した」超域的作品とみる西尾哲夫²³と同一の立場をとっている。

『千夜一夜』の生成には初めもなく、終わりもない。たえず変貌し、生成されつづけるこの作品は、固定した源泉をもたず、その帰属場所も一元的に定められることなく、たえず越境しつづけながら、本質的にハイブリッドなテキストとして現われてきたのである。

¹⁹ Mahdi, *The Thousand and One Nights (Alf Layla wa-Layla) From the Earliest Known Sources, Arabic Text Edited with Introduction and Notes, Part 3: Introduction and Indexes*, E.J. Brill, 1994 (以下の注において書名を *Part 3* と略す), chap.3 “Four Editions 1814-1843”, p.100.

²⁰ *Ibid.*, p.98.

²¹ この意味で本論文は、ガランが用いた“14世紀”シリア写本こそが本物の、真正な『千夜一夜』であるというマフディやハッダウィがとる立場に賛同しかねる。むしろこのシリア写本が、『千夜一夜』のまどってきた一つの重要な形姿を表わしていることは否定すべくもないが。

²² Ferial J. Ghazoul, *Nocturnal Poetics, The Arabian Nights in Comparative Context*, The American University in Cairo Press, 1996.

²³ 以下にその姿勢が示されている。国立民族学博物館編・西尾哲夫責任編集『アラビアンナイト博物館』東方出版、2004年；西尾哲夫『図説アラビアンナイト』河出書房新社、2004年；同『アラビアンナイト——文明のはざまに生まれた物語』、岩波新書、岩波書店、2007年。

2) 反復される「完成」

『千夜一夜』における「完成」の不在という問題を考えてみたい。

そのためにまず、基本情報として『千夜一夜』のテキストについて、いくつかの点を確認しておきたい(本論文巻末資料3「主要な写本・印刷本・訳本」参照)。現存する写本は、さきに紹介した9世紀の断片を最古として、70ほどにも上るといふ²⁴。さらに、近年、アラブ世界や周辺のイランやトルコなどイスラーム世界各地でも写本が見つかっているし、ヨーロッパでも新たな写本の発見が報告されている²⁵。資料の発掘も、その十分な整理検討も、これからの研究成果が期待される領域である。

系譜的には『千夜一夜』の写本は大きく「シリア系」と、「エジプト系」に分けられる。「シリア系」写本は、フランス国立図書館所蔵のいわゆるガラン写本(論者によって揺れはあるが15世紀頃作られたとする説が有力)と、ヴァチカン所蔵のもの(やはり15世紀のもの)、およびロンドンの英国政府インド政庁図書館に収蔵されている三点が有名であるが、いずれもエジプト系に比べるとより古く、冒頭から40話ほどを含んだところ(だいたい第200夜前後)で中断している。これらは内容も相互にかなり一致しており、同一の系列にあるものであることは確実とされている。一方「エジプト系」はシリア系を発展させたかたちで、冒頭からかなりの部分が、シリア系写本をそのまま踏襲し、そのあとにさまざまな物語を付け加えた体裁をとる。エジプト系写本には1001夜を含む、いわゆる「完全版」がいくつかある。これらはある親写本をもとに派生した一群をなしているとみられ、これを研究したゾタンベールの名をとって、総括してZER(Zotenberg's Egyptian Recension)「ゾタンベールのエジプト系版本」と呼ばれる。本論文では以下にZERと記す。ZERは1800年前後に集中して作成されている。このほかに、ZERよりも古い時代(18世紀半ば以前)に作られた「初期エジプト系」として整理される写本がいくつかある。ZERの親写本もおそらくこうした「初期エジプト系」写本をなんらかのかたちで受け継ぐものとして作られてきたと思われる。成立時代順にならべれば、シリア系、初期エジプト系、ZER写本群となるが、これらは並行して存在もしてきたのであり、相互関係も非常に複雑な要素を含んでいるので、今後の研究の俟たれるところである。

アラビア語の印刷本として重要なのは、初期の4点である。すなわち、カルカッタ第一版(1814-1818)、ブレウスラウ版(1824-1843)、ブーラーク版(1835)、カルカッタ第二版

²⁴ Cf. Margaret Sironval, « Les Manuscrits des « Mille et Une Nuits » », in J. E. Bencheikh & A. Miquel éd., *Les Mille et Une Nuits*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, vol.3, 2007, p.1015. 長短さまざまな版の総数であるが、より断片的なものや、『千夜一夜』に帰属する物語の独立した写本も含めて考えれば、その数はもっと増えると思われる。

²⁵ Frédéric Bauden, « Un manuscrit inédit des Mille et Une Nuits: à propos de l'exemplaire l'Université de Liège », A. Chraïbi dir., *Les Mille et Une Nuits en partage*, Sindbad/Actes Sud, 2004, pp.465-475.

(1839-1842)である。これらについては、以下に検討する（それら以前の部分的な印刷の試みもあとで紹介する）。またほかにはベイルート版もしばしば参照される。これはレバノンのカトリック神父サルハーニーがカトリック教会で1888年から1890年に印刷させたもので、卑俗・淫猥な面は削除または書き換えを施したものであるが、現在でも版を重ねており、とくにヨーロッパ人にとって入手が容易である点で重要である²⁶。ちなみに現在、カルカッタ第二版は印刷本を手に入れるのは容易ではないが、マイクロフィルムは図書館を通じて入手可能である²⁷。本論文はこれを利用した。ブーラク版はオリジナルの復刻版²⁸を含め、アラブ世界で種々のかたちで刊行されており、入手することができる。

西欧を中心に世界各国でなされてきた翻訳は、カルカッタ第二版を定本とすることが多い。またブーラク版に基づくものもある。2007年に刊行が完結されたばかりのプレイヤー版フランス語訳²⁹は、カルカッタ第二版とともにブーラク版を典拠としている。いずれにしても諸写本を照合した上でなされることが一般的であり、また翻訳者ごとに種々の度合いで独自の編纂をおこなっていることも前置きしておきたい。こうした点についても以下に随時触れることになる。

私たちが知っているかたちでの『千夜一夜』、すなわち現在、世界中で多くの校訂版が定本としているアラビア語印刷本の元となったアラビア語写本、すなわち ZER の祖となった写本（以下 ZER 親写本と表記）が作られたのは、すでに述べたように（推察にすぎないものの）18世紀の後半だとされている。暫定的なものであれ『千夜一夜』の「完成」をこの時点にみるのはそれほど妥当性を欠いたことではないだろう。だがここから、『千夜一夜』がその時点（1775年ごろ）まで一度も「完成」されたことがなく、このとき初めて完全な形態を達成したのだ、という言い方がよくされるのは疑問である。とりわけ『千夜一夜』が初期の小規模な物語集から次第に成長して、時代を追うごとに少しずつ容量を増やし、増加の一途をたどって、最後に完成形に至ったというように、その増殖過程を単線的に考えるのは誤っているだろう。

さきの『フィフリスト』の記述に注意してみたい。イブン・アンナディームは物語を楽

²⁶ 前嶋信次はこのサルハーニー神父による改変も、（西欧人読者にとって）、バートン、マルドリユス等と並んで（ただし逆方向にであるが）『千夜一夜』の本来の内容をかなり歪曲して伝えた元凶とされている。前嶋信次(杉田英明編)『千夜一夜物語と中東文化』(前嶋信次著作選 1)、東洋文庫、平凡社、2000年、pp.182-183。

²⁷ الف ليلة و ليلة / الف ليلة و ليلة (Book of Thousand Nights, by Sir W. H. Macnaghten, 4 vols., Calcutta, 1839-1842) [filmed by the British Library].

²⁸ الف ليلة و ليلة / مقابلة ونصحيح محمد قطة العدوي. بغداد : يطلب من مكتبة المثني ("The book of a Thousand and one night reprinted on an original copy of the Bulaq edition of 1252 A.H", 2 vols).

²⁹ *Les Mille et Une Nuits*, texte traduit et présenté par Jamel Eddine Bencheikh et André Miquel, et annoté par André Miquel, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 3 vols., vol.1 (Nuits 1 à 327): 2005, vol. 2 (Nuits 327 à 719): 2006, vol. 3 (Nuits 719 à 1001) : 2007.

しみ保護・保存したアレクサンダー大王を嚆矢としてその後ペルシアの王たちが『ハザール・アフサーン（千の物語）』の書を愛用したことを述べた箇所、その書が「千夜にわたるものであるが実際には 200 に満たない物語しか含んでいない」（下線強調引用者）と記し、なぜなら「ひとつの物語が何夜にもわたって語られることがあるから」だと述べている。つまりペルシアにおいてすでに 1000 夜を備えた物語集が存在したということだ（イブン・アンナディームが不服としているのは、1000 話を含んだ物語集ではないことだ）。さらに彼は「私は完全なかたちをとったその本を何度も見た」と証言している（そして実にくだらない本だと低い評価を与えている）³⁰。ここで注目したいのは、千夜そろったかたちがアラブ世界においてもこの時点ですでに何度も作られていたということである。この書籍商の言葉を信じるならば、千夜にわたって展開される物語集は 10 世紀以前に（しかも何度も）完成をみていたことになる。とりあえず千夜もしくは千一夜のあいだ物語が連鎖する物語集が出来上がることを『千夜一夜』の「完成」と捉えるならば、『千夜一夜』はきわめて古い段階から完成に至ったことがあり、そしてさらに興味深いことに、一度「完成」してもそれが決定的で最終的な「完成」とはみなされず、作り変えられ、またやり直されてきた³¹ということである。『千夜一夜』は完成に到達したことがないのではなく、「完成」がつねに暫定的で仮設的（*précaire*）なもののみなされるような伝統のなかに生きてきたと言える。すでに『千夜一夜』の“起源”の時代に、こうした現象が観察されるのは興味深い。

「完成」の「やり直し」はその後の発展段階でも繰り返されてきたようである。さきに本論文で第 2 期とした、17 世紀末までの中世アラブ世界での発展期にもすでに 1001 夜を備えたヴァージョンは出現していた、と考えることは不可能ではない。『千夜一夜』の写本研究の第一人者ゾタンベールの研究には、この点で興味深い情報がある³²。1888 年の浩瀚な論文のなかでゾタンベールは、当時はまだ謎であったガランの使用した写本の実体を推定するために、ほかのさまざまな写本を検討している。ゾタンベールは、ガランが『千夜一夜』の写本をシリアから入手して翻訳を出した時点で、ガランは知らなかったものの、パリの国立図書館（BN）にはすでに『千夜一夜』の写本が二つ所蔵されていたことをつきとめ、その内容を紹介している。それらはどちらも、17 世紀末までのアラブ世界で、1001 夜分を備えた『千夜一夜』の編集が少なくとも試みられていたことを示している。この二

³⁰ *The Fihrist of al-Nadīm*, p.714.

³¹ 「個」がそれ自身に閉じないための方策は、個が完成しても、それを最終形態とせず、また「やり直す」という回路にそれを置くことである。ジャック・デリダが「やり直し *refaire*」という概念を重視していたことは、第 I 部のとりわけ第 3 章第 2 節の 5) でみた。

³² M.H.Zotenberg, « Notice sur quelques manuscrits des *Mille et une nuits* et la traduction de Galland », in *Notice et extraits des manuscrits de la Bibliothèque nationale de Paris*, no.28, 1888, pp.167-320.

つの写本について、ゾタンベールの論文をもとにみてみたい。

第一は、18世紀初めにフランスの総領事としてエジプトおよびレヴァント地方に赴任したブノワ・ド・マイエ (Benoît de Maillet) がフランスへ持ち帰った写本 (BN分類番号 1419A) である。ゾタンベールによれば、これは 17 世紀後半に書かれた写本で、一人の手で丁寧な字体で書写されたものだという。18 世紀後半に編纂される ZER と区別して、「初期エジプト系」の写本と呼ばれるものの一つである。408 紙葉からなる大判の 1 巻本で、第 1 部から第 29 部までに分かれている。内容は 870 夜までを含み、そこで中断している。話が途中で途切れている箇所や (おそらくあとから書き足すつもりだったと思われる) 白紙の箇所があったり、夜の番号が乱れている箇所がいくつかあるなど、もろもろの意味で未完成の版ではある³³。このマイエ写本は (一度 1001 夜まで達成されたものの最終部分が散逸したのではなく)、おそらく未完成・未完結のままに放り出されたものとされている。しかしこの写本が、1001 夜を備えたバージョンを完成させる試みであることは明らかである、さらに興味深いのはその構成内容、とくに夜の番号の乱れ具合である。

マイエ写本の構成 (断りがない数字は夜の番号)

第 1 部～第 10 部 : 1-465

詳細内容 : 1-50, 50-74, 70-74, 75-92, [「せむしの物語」途中の欠落部、その割には夜の番号のとびが大きい] 150-192, 193-228, 229-250, 251-268, 269-286, 286-304, 304 (混乱あり)-434, 433-465

第 11・12 部 : [ここで戻る] 245-289

第 13 - 18 部 : [第 13・14, 17 部は夜の分割なし] (このうち第 15・16, 18 部は欠落)

第 19 部 : 247-273

(第 20 - 23 部 : 欠落)

第 24 部 : 674-693

(第 25 部 : 欠落)

第 26 部 : 740-774

(第 27 部 : 欠落)

第 28 部 872-905

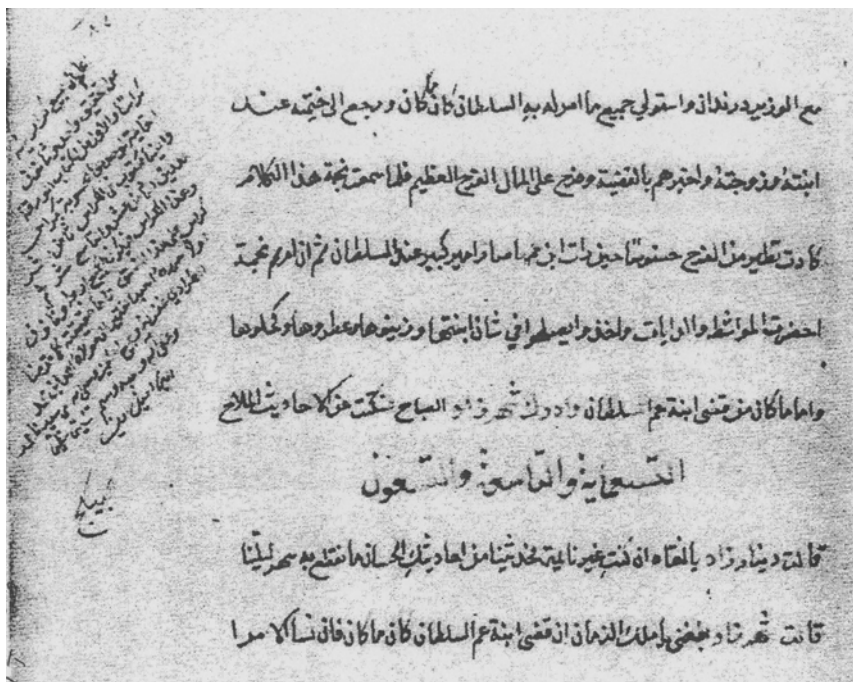
第 29 部 841-870

第 1 部～第 10 部まで、夜の番号で 465 夜までは (多少の混乱は含むものの) 大まかにいって安定した一続きをなしている。おそらく、ここまでを含むかなり整理された既存の版を書写したものとされる。その後、第 11 部以降は、ほかのさまざまな『千夜一夜』の版

³³ 収録話の情報として興味深いのは、ガランが聞き書きして足した「眠っているが目覚めている者」がこの写本では収録されていることである。ガランに物語を語ったハンナは、この話が『千夜一夜』に帰属するものとされてきたことを知っていて、紹介したのかもしれない。ZER とは異なる多様な小話が収録されていることは、『千夜一夜』の編纂に当たって臨機応変に小話を組み入れることが伝統とされてきたことを示しているのかもしれない。

およびその他の物語を寄せ集めものと考えられている。第11部の始まりの夜の番号が「245夜」に戻っているのは、内容としては第10部までに未収録の物語を引き写したのだろうが、その際にその物語が収められていたもとの写本での夜の番号まで写してしまったためだと思われる。膨大な書写作業のあいだに個人の記憶を正確に保つのは当然困難であり、おそらくこの第11部以降第29部までのあいだに多くの情報源を用いたために、すでに収録した物語と同一の物語を重複して（第17部と第24部で「二人の泥棒の話」ほかいくつかの小話が重複）収録してしまったミスも見受けられる³⁴。こうしたことから『千夜一夜』のさまざまな選集が存在していたことが推察される。とりわけ興味深いのは第28部で一度905夜まで到達し、第29部が夜の番号としては再び841夜に戻って始まっていることである。これは、すでに1001夜まで達した写本が断片的にでも存在していた（しかも複数存在していた）ことを示しているのかもしれない。

(参考資料) 写本欄外への書き込み：引き写している元の資料についての言及



パリ国立図書館所蔵の写本
MS. Arabe 4679,
fol.400r

本文と同じ字体で書かれているところから、この写本を書いた写本家がいわば出展情報として記したと思われる。内容は以下のとおり。

「ノート（分冊）は全部で81冊ある。最初のもの第1ページは独立した分冊とみなせる。第18ページと19ページも同様である。したがって84分冊ということになる。

記されているところによると、これらは、「貧しい従者」によって彼の主人であるアフメド・ベン・ムハンマド・エル・タラッディ氏のために書かれたものであったという。神がこの人物を、そしてわれらが預言者ムハンマドの国全体を、懲罰から遠ざけられんことを。
クバイカジュ（署名）」

こうした欄外の記述から、写本家が元の資料を駆使して次の写本を作っていく様子が想像できる。³⁵

³⁴ このマイエ写本では完全に同じ話の繰り返し（再録）がみられるという。これは単なるミスだとみなせるだろう。これに対して ZER では、異なる物語のなかでの同じモチーフの再利用はあっても、物語全体の機械的な重複は例外を除いて、ほとんどない。

³⁵ アラビア語解説協力: Ridha Boullaabi (フランス、ピカルディー大学物語センター研究員)。

パリの国立図書館がガランの時代にすでに所蔵していたもう一つの写本は、さらに古いもので、興味深いことにトルコ語（オスマン・トルコ語）で記された写本である。これは11巻からなるが、実は第2巻から第10巻が一揃いで、第1巻と第11巻はそれぞれ『千夜一夜』の冒頭部を収めた別物の版で、ここにたまたま一緒に整理されたい。ゾタンベールが調べた蔵書歴によると、1660年頃にマザラン図書館³⁶に収められたものが、1668年に国立図書館³⁷に移蔵されたものである。一続きの写本である第2巻～第10巻のうちの五つの巻は一人の手で筆写されており、ヒジュラ暦（イスラーム暦）の1046年と記されている。すなわち西暦の1636-1637年となり、フランスの図書館への収蔵時期とも不整合はない。ともかく17世紀半ばまでに書かれたものであることはまちがいないとされる。内容は途中で脱落があるものの、第1夜から第765夜までほぼ連続している。収録話としては、シリア系写本にはみられない「海のシンドバード」の物語（短いものであるが）やその他9つのほどの物語が収録されていることも特徴として挙げられる³⁸。このトルコ語翻訳版（アラビア語から直接訳されたのかどうかは疑問であるが³⁹）も、あきらかに1001夜を備えた版を達成しようとする試みの一つであり、もしかしたらその元となる、あるいはそのモデルとなる版が存在していたのかもしれない。

こうした点をもみても、グロツフェルトHeinz Grotzfeldの主張する『千夜一夜』の「完全写本Complete manuscriptは何度も作られ、短命で消えて、何度も作り直された」とする説⁴⁰は支持できそうであるし、このことは『千夜一夜』の生成過程をイメージする場合に強く意識しておくべきだと思われる。グロツフェルトは、1759年に書かれたとされるある

³⁶ リシュリユーの後を継いでルイ 14 世の宰相となったマザラン枢機卿（イタリア人 Giulio Raimondo Mazzarino、フランス名 Jules Mazarin、1602-1661）が1643年から収集を始めた蔵書コレクションを、その当初から公開したもの。フランス最古の公共図書館とされる。1652年には収蔵4万冊を数えたという。死後の散逸を恐れて彼自身が創設を定めたコレージュに、美しい木製書棚とともに1661年に移管される。のちにフランス学士院の一部となる。

³⁷ フランスの国立図書館（Bibliothèque nationale）は、シャルル5世の時代（1368年）に創設され、ルイ14世時代に蔵書を拡大した。公開されるのは1720年以降。

³⁸ 収録話として付言しておきたいのは、このトルコ語版にもさきに挙げたメイエ写本でも、「オマル王」の話が収められていることである。歴史的戦記物である「オマル王」の物語は『千夜一夜』にはそぐわないもので、ZER編纂のおりにとってつけたように、水増しのために付け足されたという説もしばしば見受けるが、より古い複数の版でも収録されているところを見ると、この物語を『千夜一夜』の一部とすることは慣習化していたと言えそうである。グロツフェルト Heinz Grotzfeld も、15世紀または16世紀のものと思われるエジプト系のある写本（Tubingen Ms Ma VI 32）にオマル王の物語が含まれていることを指摘している。

³⁹ Norrisの研究によれば、17世紀のルーマニア語版は、（前身のペルシア語版→）9世紀のアラビア語版→シリア語版→ギリシア語版という変遷を経て、度重なる翻訳伝播ののちに成立したものと推察されている。『千夜一夜』のさまざまな地域、さまざまな言語への翻訳と各地での再編集の作業も、きわめて興味深い課題である。

⁴⁰ Heinz Grotzfeld, “The Manuscript Tradition of the *Arabian Nights*”, in *The Arabian Nights Encyclopedia*, vol. 1, p.19.

写本 (Gotha MS 2638) に注目した。これは断片的な写本ではあるが、889 夜から 1001 夜の部分を含んでおり、しかものちに印刷された完全版のブーラク版と収録話も写本系統によって異なる結末部分も同一で、言葉遣いまで一致している。こうした点を挙げて彼は、このゴータ写本を ZER 以前に存在した完全版の一部とみなしている。そしてこれが 40 年後 (18 世紀後半から末にかけて) にさまざまな系統の写本を組み合わせる ZER の親写本が編纂される際の一つの源泉として用いられたと推察している。

グロツフェルトの主張でさらに興味深いのは、完全写本の作り直しのサイクルが比較的短時間だったという点である。彼は、それを以下のように論証している。1800 年から 1810 年の時期、カイロでは沢山の完全版写本が存在していたことが報告され、複数のヨーロッパ人 (フォン・ハンマー=プルクシュタール Joseph von Hammer-Purgstall, アスラン・ド・シェルヴィル Jean-Louis Asselin de Cherville, シーツェン Ulrich Jasper Seetzen) がそれを入手して持ち帰っている。だが 30 年後 (すなわち、カルカットで完全版『千夜一夜』のアラビア語印刷本の制作が企画された時期) には、カイロから写本が消えていたことが知られている。この時期に再び作成しなおす必要が実際生じたことの証左として、現在ストラスブールに保存されている完全版写本であるラインハルト写本 (Reinhardt MS) が挙げられている。このラインハルト写本には 1831-32 年に筆写されたことが記されているが、18 世紀末のカイロで一度完成された ZER と内容は同一ではない。ZER 全体を転写したものではなく、ZER を部分的に含んでいるほかに、さらにより古い写本からいろいろな、今では名も知れぬ物語を寄せ集めている。ZER 所収の物語も多く含まれているが、配置順序は異なっているし、言葉遣いも違うことが多い。こうした点を論拠にグロツフェルトは、ラインハルト写本が 1831-32 年の時点で新しく編纂し直されたものであると結論する。すなわち、グロツフェルトの考えによれば、少なくとも『千夜一夜』のケースでは、写本は 30 年もすれば使い古され、散逸し、新たに作り直す必要が生じてきたのであり⁴¹、しかもその際、もとにあった古い写本をまるごとそっくり写し直すのではなく、さまざまな典拠^{ソース}を組み合わせる再編集をおこなうことが繰り返されてきた、というわけである。

たとえばラインハルト写本が ZER にかなり依拠していながら、忠実にそれを再転写するのではなく、話の順序や表現に変化を加えていることから、写本製作者は新たな写本を作る際に、ほかの写本に書かれて残されている物語を転移収録するという原則を維持しながら

⁴¹ マフディがカルカット第二版について論考している箇所⁴¹で提起している説も興味深い。すなわち、この印刷本刊行の際に定本とされた写本 (通常マカン写本と呼ばれる) が現存していないのは、出版準備の過程で、この写本が使い古されてぼろぼろになり、もはや解読不能になったために捨てられたのではないかとマフディは推測している (Mahdi, *Part 3*, p.242, note 56)。死蔵されているのではなく使われていると、写本というのは思った以上に早く損耗し、寿命を迎えるのかもしれない。そうなってしまうといとも容易に廃棄されるということが、編纂の新たなやり直しという現象を促進するのであろう。

ら、編集者として新たな創意を加えてきたのだと考えられる⁴²。『千夜一夜』の伝統は、パーツの入れ替えや並べ替えをたえずおこないながら甦生をくり返すことで保たれてきたのだ。

たとえばZERに先立つ 1001 夜を備えた完全版写本として有名なモンタギュー写本は、「荷担ぎやの物語」の終わりまでは他の数々の写本と同様ガラン写本と夜の区切り方まで同一であるが、その後は、D・マクドナルドによれば「カオス」だと言う。すなわちその後作られたZERとは構成内容がかなり異なっている、ということだ。マクドナルドはここから「この時期〔モンタギュー写本が作られたと推定される 18 世紀半ば〕でも、一般に公認された編纂版recensionは存在していなかった。そして各人は自分の編纂版をこしらえなくてはならなかった」⁴³と述べている。

私たちは、変化しながらの再生産、テキストの同一性と差異の結合の象徴的な場の一つとして『千夜一夜』という「作品」を位置づけることができるだろう⁴⁴。『千夜一夜』は、本論文が第 I 部でみてきたようにデリダが描き出そうとした、文学における系譜なき系譜——あるいは、つながりなきつながり——、言い換えれば、「断絶」（ないしは「裏切り」）をともなう「継承」の典型的な例であるとみることができるだろう。

いくつもの写本を合成しつつおこなわれた痕跡が十分にうかがえるZERの編纂も、したがって、ある意味では、数ある完全版写本再編集の一事例だったとすることができる。マクドナルドの研究⁴⁵が示しているように、すでに十分な量おそらくは 1001 夜を備えた完全形態に達している写本に依拠しながら、ZER編纂にあたっては、そこにさらに物語を追加したいがために、夜の区切りを広くとり直して、いわば夜を稼いだようである。ZERはこうした再調整の産物にほかならない。

ZERの成立は『千夜一夜』の歴史のなかで、決定的にそれ以前とそれ以後を分かつ「断絶」としてみなされてきた面がある。たしかにZERの成立は、その後の『千夜一夜』の展

⁴² むろん長大な物語集である『千夜一夜』の場合、あまりにも大部となるので写本が物理的あるいは人為的理由から分解してしまい、完全な形態をとどめる写本がすぐに存在しなくなるという事情も考えられる。しかし、むしろこの物語集はたえず作り直されるべきだという認識が『千夜一夜』固有のポリシーとして働いてきたであろうことに注目したい。

⁴³ Duncan MacDonald, "A Preliminary Classification of Some Mss. of the Arabian Nights", in *A Volume of Oriental Studies: Presented to Edward G. Browne on his 60th Birthday*, ed. by W. Arnold and Reynold A. Nicholson, Cambridge University Press, 1922, pp.304-321.

⁴⁴ これは写本時代にはむしろ一般的な現象であったことは言うまでもない。たとえば「アーサー王伝説」や「トリスタン物語」など、とくに「……物語サイクル（群）」と呼ばれるような大「作品」は、数多くの異本（ヴァリエーション）を伴いながら、長い時代にわたってまた広い地域で継承され存続してきた。ただ『千夜一夜』の場合は、あえて作り直し作り変えることを積極的に写本製作者たちがめざした（おそらくはこの作品の原理に導かれてほとんど無自覚なままに当然のこととして）と思われる点が特異である。

⁴⁵ MacDonald, *op.cit.*

開という面からみれば画期的な重要性をもっている。ただ一人の手によって整った文体で書かれ（そのことに対する評価は分かれるだろうが）、完全なミスとしての重複や極端な不整合を含まないという意味で完成度も、おそらくそれ以前には実現したことがないほど高いものだと考えてよいだろう。だがZERのような完全版写本の作成それ自体は未曾有のことではなく、これもまた連綿と繰り返されてきた多くの試みのうちのひとつ（その反復例）にはかならない——むろん後世に決定的な影響力をもったものであることは確かだが⁴⁶。実際、ZERをもとにしたアラビア語印刷本もZERに完全に忠実であったわけではないし、やはりZERに大幅に依拠する第2の完全版アラビア語印刷本であるカルカッタ第二版となると、ZERを用いながらさらにヨーロッパに知られたほかのさまざまな写本伝統を加味したものであることが突きとめられている。こうした「合成」を不純だとして低く評価する傾向が『千夜一夜』研究においては基調となっているように思われる⁴⁷が、『千夜一夜』が雑多なものの寄せ集めの場であり、さらにたえずシャッフルし直して組み換えられ、複数の異本をもとにして編成し直されることによって、そのつど更新され甦ってきたことを考えるならば、ちぐはぐと評されるこうした合成はまさに『千夜一夜』の真髄をあらわしているということもできる。そしてこのちぐはぐさが、また次の世代の再編纂を喚起してやまないのである。ちぐはぐさを失った『千夜一夜』は、固定してしまうだろう。そして変貌をやめ固定してしまった『千夜一夜』は、死蔵へと向かい、生命を失うのかもしれない。

「完成」のやり直し、改変しながらの継承という『千夜一夜』のこの伝統は、本論文で第3期と設定したヨーロッパへの紹介以降も、ますます顕著になる。

アントワヌ・ガランが『千夜一夜（アルフ・ライラ・ワ・ライラ）』という書名どおりに、その分量にふさわしい物語集を実現しようとして、さまざまな情報源（すなわち「ガラン写本」と呼ばれる『千夜一夜』の写本4巻——現存は3巻で、ガラン自身の記述どおり4巻本の写本セットがあったかどうかは疑問なのであるが——、シンドバードの物語を

⁴⁶ まさに、本論文が第I部でもしばしば検討した、デリダの唱えた「反復可能性 *itérabilité*」という概念を例証するものとしてZERをみなすことができよう。

⁴⁷ とりわけガランの依拠したアラビア語写本（3巻）をパリの国立図書館で見つけ出して校訂出版したマフディはこの立場をとる。マフディによれば、この14世紀写本（彼は200夜分途切れているこの写本を14世紀のものと推定しているが、15世紀のものとする研究者もいる）は、整合的に考えられ配列されているけれども、普通完全版とよばれるZERなど1001夜を備える版は寄せ集めの捏造の代物であると評し、これを一貫した一つの全体だと考えるのは間違っていると述べている。こうした主張の背後には、いわゆる完全版はまがいもので、彼の校訂した14世紀写本こそが『千夜一夜』の正当な姿をとどめたものだと価値判断が覗く。マフディ版『千夜一夜』の英訳者ハッドウィはなお強固に、この「一貫性」と「均質性」を保った14世紀写本のみが「真正な」『千夜一夜』であると主張する。Cf. Husain Haddawy, "Introduction", in Haddawy trans. *The Arabian Nights*, pp. xv-xix.

収めた独立写本、その他の写本、ハンナからの口述と筆記による物語の提供) を用いて彼の『千一夜——アラビア物語集』 *Mille et une nuits, contes arabes* を作り出したのもその典型的な一例と捉えることができる⁴⁸。

ガランは1704年に第1巻から第6巻までを出版し、1706年に第7巻を出版する。これらは「ガラン写本」を翻訳したもので、さらに第3巻にはそれとは別個にさきに入手し翻訳してあった「海のシンドバードの物語」を挿入したものである。しかし第7巻目までで手持ちの写本は訳し尽くしてしまったので、読者の好評に応えるためにも、ガランは付け加えるべき物語を求めていた。原稿を待ちきれない出版社は、ガランの承諾を得ずに、ペティ・ド・ラクロワが準備していた『千一日物語』⁴⁹から3篇(2篇と1枝話)を抜粋してガランが準備してあった1篇(「愛の奴隷、アブー・アイブーの息子、ガーニムの物語」)に加えて、ガランの第8巻目として1709年に出版してしまう(この件についてガランは第9巻の緒言で激しく非難している)。ガランの日記によれば、この年3月、ガランはパリに来ていたシリア人の修道僧ハンナ・ディヤーブを紹介してもらい、6月にハンナがパリを出発するまでのあいだにガランはディヤーブから全部で14の物語を聞きだしメモにとることができた。また物語の梗概をハンナに書いてもらったものもあった⁵⁰。ハンナとの出会いから1年半以上たった1710年11月にガランは、ハンナに書いてもらった物語を読み直し、フランス語に訳し始める。こうして翌年1月までに原稿が作られて「アラジンと不思議なランプの物語」を含む第9巻と第10巻が1712年に出版される(ただし第9巻に収められている「目



⁴⁸ Mahdi, *Part 3*. とくに第1章「アントワヌ・ガランと『ナイト』」に詳しい。

⁴⁹ ペティ・ド・ラ・クロワ François Pétis de la Croix (1653-1713) は、ガランと同時代の東洋学者。『千一日物語』 *Les Mille et un Jours* は1710年から1712年にかけて出版された。トルコ語からの翻訳で、原本(不明)はインドの物語をもとにイスパハンで作られたとされるだけあって、内容はペルシアおよび中央アジアの要素を多く含む。最上英明の紹介によれば、ペティ・ド・ラ・クロワは著名な東洋学者の父親のもとに生まれ、「1670年、16歳の時にはコルベールにより中東の使節として派遣され、エジプト、パレスチナ、ペルシア、アルメニアなどを訪れた。また小アジアを経由してコンスタンティノープルにも赴いた。旅行中は、言語、文学、風俗、習慣、美術なども研究し、ありとあらゆる珍しいものを集め、また多数の写本を王立図書館へ持ち帰った」という。さらに「近東諸国の言語を担当する海軍省の通訳秘書になり、トルコやモロッコへ学術調査や政治使節としても赴き」、「1692年にコレージュ・ロワイヤルのアラビア語の教授に就任し、その数年後、父が亡くなったあと、父の務めていた国王の通訳秘書の職も引き継いだ」とのことである。参照、最上英明「[研究ノート] 『千一日物語』の枠物語」、『香川大学経済論叢』第75巻第3号、2002年。以下のHPに掲載。

<http://www.ec.kagawa-u.ac.jp/~mogami/1001tag.html>

⁵⁰ ハンナから得た物語のうちで、ガランによって原稿化されなかったものも3篇あることが日記との照合からわかる。

覚めていながら眠っている者の物語」については、ガランがハンナから聞き取ったという記述が日記にないので、別途に写本を入手してそれを訳したとも考えられている。たしかにマイエ写本やトルコ語写本などによってこの物語が写本として実在したことは確かめることができる。ガランはさらに 1711 年 8 月以降は、ハンナから物語を聞いたときにとった自分のメモを読み直して、物語をいわば書き下ろしていく。「アリババと四十人の盗賊」の物語もそのうちの一つである。こうして 1712 年 5 月までに第 11 巻の原稿を、1713 年 6 月初めまでに第 12 巻の原稿を整えた。かくしてガラン死去の年、1715 年に第 11 巻と第 12 巻（最終巻）が出版された⁵¹。

参考：ガランの『千一夜』12 巻本構成〔枝話名は適宜省略〕

- 第 1 巻 (1704) 「千一夜」(枠物語)、「ロバと牛と農夫、寓話」「商人と魔人」「漁夫の物語」「王の子である三人の遊行僧たちと五人のバグダードの女たちの物語」
- 第 2 巻 (1704) 「三人の遊行僧たちと五人のバグダードの女たちの物語」(続き)
- 第 3 巻 (1704) 「海のシンドバードの物語」「三つのりんご」-枝話「ヌルディーン・アリーとバドルディーン・ハサンの物語」
- 第 4 巻 (1704) 「ヌルディーン・アリーとバドルディーン・ハサンの物語」(続き)、「せむしの物語」
- 第 5 巻 (1704) 「せむしの物語」(終り)、「アブルハサン・アリー・エブン・ベカールとカリフ、ハールーン・アルラシッドの寵姫シャムスルニハールの物語」
- 第 6 巻 (1704) 「アブルハサン・アリー・エブン・ベカールとカリフ、ハールーン・アルラシッドの寵姫シャムスルニハールの物語」(終り)、「カルダンの子供たちの島の王子カマルザマンと中国の姫バドールとの恋の物語」
- 第 7 巻 (1706) 〔緒言:これ以後夜の区切りをやめる〕「ヌルディーンとペルシアの美女の物語」「ペルシアの王子ブドゥルとサマンダル王国の王女ジャウハールの物語」
- 第 8 巻 (1709) 「愛の奴隷、アブー・アイブーの息子、ガーニムの物語」「ゼイン・アラスナム王子と魔人たちの王の物語」「コダダッドとその兄弟たちの物語」(一枝話「デリヤバールの王女の物語」)
- 第 9 巻 (1712) 「目覚めていながら眠っている者の物語」「アラジンと不思議なランプの物語」
- 第 10 巻 (1712) 「アラジンと不思議なランプの物語」(終り)、「カリフ、ハールーン=アル=ラシッドの冒険」(枝話「盲目のババ=アブダラの物語」「シディ・ヌーマンの物語」「コギア・ハサン・アルハバルの物語」)
- 第 11 巻 (1715) 「コギア・ハサン・アルハバルの物語」(終り)、「アリババと、女奴隷に皆殺しにされた四十人の盗賊の物語」「バグダードの商人アリー・コギアの物語」「魔法の馬の物語」
- 第 12 巻 (1715) 「アフメド王子と妖精パリ・バヌーの物語」「妹に嫉妬した二人の姉の物語」

以上の経緯からわかるように、ガランの 9 巻目以降は、単に翻訳というよりも、かなりガランの作業が加わった物語たちである。ガランのまったくの創作ではないにしても、ハ

⁵¹ Cf. Zotenberg, « Notice sur quelques manuscrits des Mille et une nuits, et la traduction de Galland », in *Notice et extraits des manuscrits de la Bibliothèque nationale de Paris*, n°28, 1888, pp.167-320; Mohamed Abdel-Halim, *Antoine Galland, sa vie et son œuvre*, A. Z. Nizet, 1964; Galland, « Journal parisien d'Antoine Galland (1708-1715) », E. Champion, 1920; article « Galland, Antoine », in *The Arabian Nights Encyclopedia*, pp.556-560.

ンナという人物の記憶や彼からの聞き書きをもとにした物語に拠っており、かなりその出所は怪しいと言わざるを得ない。しかしガランは、彼の翻訳書のはしがきなどで、確実に存在するアラビア語写本からの翻訳であることを装っていたために、読者はのちのちまで第9巻目以降に含まれる物語たちも、第8巻目までとまったく同様⁵²に、正真正銘のアラブ世界での伝承物語の翻訳として受けとり、それらを含むものとして『千夜一夜』の世界をイメージしてきた。これらのなかにはその後（捏造された写本——すなわちガランのテキストをアラビア語に反訳したもの——以外には）アラビア語写本が見つからない、いわゆる「孤児の物語」も7編ある。とりわけ、一般に『千夜一夜』の中心的イメージをなしてきた「アラジンと不思議なランプ」と「アリババと四十人の盗賊」は、まさにこの、写本の見当たらない物語である（ゲルハルトはこれらを「孤児の物語orphan stories」と呼んだ⁵³）。『千夜一夜』の“中心”が実は虚像かもしれないこと、“中心”の起源が解明不可能であること、私たちのもっている『千夜一夜』像がある意味では『千夜一夜』への「裏切り」であること、『千夜一夜』がいわば中心をずらしながら存続してきたこと、とりわけヨーロッパへの紹介という『千夜一夜』の新たな生命の開始において、『千夜一夜』が知らず知らずのうちに（読者においてはむろんであるが、ガラン自身も『千夜一夜』という物語集を自分に可能なやり方で再現しようとしただけで、捏造する気持ちはなかったであろう）別物へと変貌することで確固たる存在を獲得したこと、こうしたことはみな偶然ではあるのだが、『千夜一夜』という物語集にとってはある意味では必然であったのかもしれない。ともかく『千夜一夜』という不安定な作品は、それ自身が本来的な「虚構」として存在していることが興味深い。

ガラン以後もヨーロッパにおいてこの熱は、ときに捏造を生み出しながら、受け継がれる⁵⁴。1783年頃からフランスに滞在してアラビア語を教えるなどしていた、シリア出身のアラブ人キリスト教司祭ディオニシウス・シャヴィシュ、通称ドム・デニス・シャヴィイDom Denis Chavisは最初、『千夜一夜』のアラビア語版を作り直そうと試みた⁵⁵。631夜までを仕上げたものの（この中には、ガランのフランス語テキストをアラビア語に反訳した「ア

⁵² 第9巻の序として付したガランの非難ものちの版では削除されたために、第8巻におけるベティ・ド・ラ・クロワによるペルシア物語集の翻訳『千一日物語』からの物語の混入という事実も、忘却されていった。

⁵³ Gerhardt, *The Art of Story-Telling*, p.14.

⁵⁴ Mahdi, *Part 3*, 第2章「ガランの後継者たち」に拠る。以下本論の記述はおおむねこの章の情報に依拠している。

⁵⁵ シャヴィイ写本としてパリの王立図書館に所蔵されることになる。4巻本。うち二巻は、ガランの用いた写本の写し。一巻はガランが付け足した物語をシャヴィイがアラビア語に訳したもの。さらに一巻はシャヴィイがシリアからもちこんだ写本のコピー。

ラジン」の物語も収められていた) これを諦めたあと、フランス人作家カゾットJacques Cazotte⁵⁶と組んで、フランス語翻訳版として『続・千一夜』*Continuation des Mille et une Nuits*, 1788-89 を出版する⁵⁷。これはガランの用いたアラビア語写本のほかに、シャヴィがガランのフランス語をアラビア語に訳したものをフランス語に再訳したもの、シャヴィ(およびカゾット)の自由な再話ないし作話を含む⁵⁸。これをはじめとして18世紀末以降ヨーロッパでは、ヨーロッパ語ないしはアラビア語での『千一夜』の再編集や補遺の出版に多くの者が手を染める。1771年にアレppoからアラビア語物語集の写本を持ち帰り、英語で口述して出版させたラッセルPatrick Russel、インドから持ち帰られた写本をもとにアラビア語の選集(1797年)と何篇かの英訳を出したスコットJonathan Scott、シャヴィの用いたアラビア語物語集写本を新たに仏訳してガランの補遺として出版(1806年)したペルスヴァルCaussin de Perceval、ガランの再刊にさまざまな典拠から2巻分の補遺を付け足して刊行(1822-23年)したゴーチエEdouard Gautier、のちにもう一度触れるように、ZER写本を手に入れてガランにない物語を訳出したフォン・ハンマー＝プルクシュタール男爵Josef Feiherr von Hammer-Purgstallなどである⁵⁹。

とりわけ興味深いのはサッバークのケースである。ミシェル・サッバークMichel Sabbaghはシリア生まれのアラブ人で、ギリシア正教系のキリスト教徒アラブの家庭におそらく1775年頃に生まれ、エジプトなどで勉強した。いったんシリアに戻った後、ナポレオン軍とともにカイロに赴き、ナポレオン軍⁶⁰がエジプトから撤退する際に(したがって1801年頃)パリへやってきた。

ちなみにナポレオンのエジプト遠征はこうした東西の学術交流を広げる上で特筆すべき重要性をもっている。3万5千から5万人といわれる兵を率いてエジプトに乗り込んだナポレオンの遠征は、フランスに中東ブームを巻き起こす。最初の攻勢がすぐに逆転され、ナポレオン不在のなかで取り残された残兵とともに、約200人の学術調査団がさまざまな調査・研究活動をエジプトの地で現地の知識人の強力も得ながら展開した。(悪名高い遺跡

⁵⁶ 『恋する悪魔』*Le Diable amoureux*, 1772で知られる異色のフランス作家(1719-1792)。次世紀の幻想小説ブームの先駆的存在。ガランの『千一夜』に強い影響を受け、みずからそれを模した創作(『猫の足』*La Patte de chat*, 1741、『千一のたわごと』*Les Mille et une Fadaises*, 1742)も若い頃からおこなっていた。

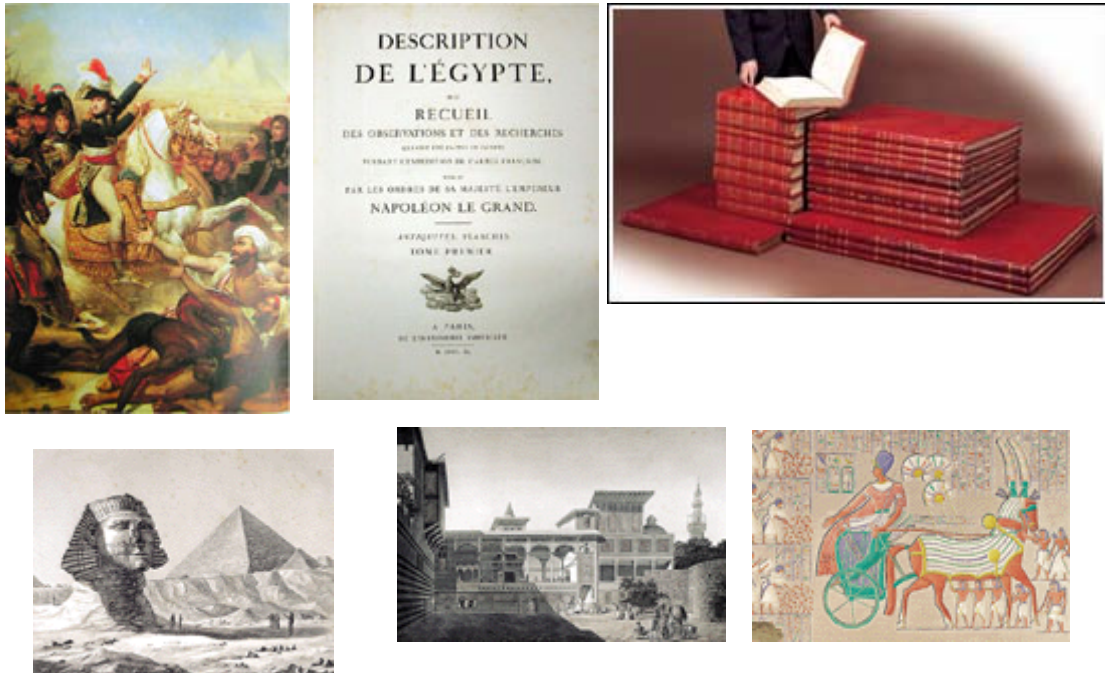
⁵⁷ マフディによると、一度下火になったおとぎ話の流行が1780年代に復活し、ガランの『千一夜』もリプリントされて“妖精文庫Cabinet des Fées”から出版された。こうした流れを受けて、フランス語での続編出版の要請が出版社(Barde)から持ち込まれた。

⁵⁸ この『続・千一夜』はかなり好評をもって迎えられ英訳版三種をふくむ各国語に翻訳されという。Mahdi, *Part 3*, p.58.

⁵⁹ MacDonald, [article] “Alf Layla wa-Layla”, (first) *Encyclopedia of Islam*, 1913-1936, vol. IX, Supplement 1, p.18; Littmann, [article] «Alf Layla wa-Layla», *Encyclopédie de l’Islam*, 2nd ed., vol.1, Brill, 1960, p.370.

⁶⁰ ナポレオン自身は1799年に、少数の側近とともに、フランスに帰国していた。

の篡奪と並行する文化収奪の面もちろん含んでいるが) こうした活動の成果としてもちかえった膨大な資料をもとに、1809年から14年間をかけた整理ののち『エジプト誌』⁶¹23巻が刊行された。974点の図版を含み、うち74枚はカラー印刷。もともと大判の巻は、縦1メートル、横81センチメートルの版型である。現在でも第一級の資料として貴重なものを数多く含んでいる。



【図版、上段左から：ピラミッドを背景に戦うナポレオンを描いた絵画、『エジプト誌』の表紙、大判の全巻。下段：『エジプト誌』に収められた多数の図版から】

当時沸き起こった中東ブームにあやかっただのであろうか、サッバーグは、バグダードで筆写されたという1001夜を完備した写本を発見したと周囲に述べ、これを王立学院 *collège royale* のアラビア語学部長だった前述のペルスヴァルのために1810年頃までに「転写」して渡した。これが「サッバーグ写本」である。このサッバーグの書いた写本はその後多くの西欧語翻訳の典拠となり、とりわけハビヒトの版にとり入れられた⁶²結果カ

⁶¹ *Description de l'Égypte, ou, recueil des observations et des recherches qui ont été faites en Égypte pendant l'expédition de l'armée française, 1809-1828* (『エジプト誌——フランス軍進駐下でおこなわれた調査と研究の収集』)。

⁶² ペルスヴァルが所蔵していたこの“バグダード写本”の写しすなわちサッバーグ写本は、1827年にライプチヒの有名なアラビア語教授フライシャーHeinrich Fleischerに貸し出された。フライシャーは、ライプチヒでやはりアラビア語を教育していた先達ハビヒトが「発見」という「チュニジア写本」を批評するためにこれを用いたという。このチュニジア写本とは、実はハビヒトがヨーロッパのさまざまな図書館にあるアラビア語物語集を寄せ集めたり、ガランのテキストをアラビア語に訳したりして作り上げたもので、現在では「捏造」されたまがいものとみなされているものである。このチュニジア写本を校訂したアラビア語印刷本をハビヒトは1825年から刊行しはじめる。第8巻を終えたところで1839年にハビヒトは死去し、

ルカッタ第二版にも内容が反映した点で、世界的にきわめて大きな影響力をもつことになった。カルカッタ第二版を作成する時点で、1001 夜を備えた完全版のアラビア語『千夜一夜』として知られていたのは、1835 年出版のブーラク版印刷本（ヨーロッパ世界にはあまり知られていなかったらしい）を除けばこのサッバーグ写本のみであり、その元である「バグダード写本」が 1703 年 10 月 21 日（すなわちガラン訳第 1 巻が出される直前）の奥付をもっているとされていたので、西欧の影響が入る前にアラブ世界で作られた正真正銘の完全版として、とくに貴重な資料だとみなされていた。19 世末にパリの国立図書館のためにこのサッバーグ写本を購入したゾタンベールも、『千夜一夜』の諸写本について 1922 年にきわめて信頼性の高い論文を書いたマクドナルドも、このサッバーグ写本の正当性を疑わなかった。

だがマフディの詳細な検証で明らかにされたところによれば⁶³、サッバーグが発見したというバグダード写本は架空の存在で、その転写と称されていたサッバーグ写本は、実はサッバーグ自身がさまざまな写本をもとにパリで作りに上げたものだった。サッバーグはもともとアラビア語の大作家⁶⁴で文化人であり、パリに来てからは、フランス東洋語学院を創設したラングレー Louis Matheau Langlès や、アラビア語学部長を勤めラングレーのあとその学院長の職をひきついだ有名なセム語学者であるシルヴェストル・ド・サシ男爵 Sylvestre de Sacy と知りあい、彼らの庇護を受け、王立図書館でアラビア語写本の筆写・保存の職務についた。サッバーグは王立図書館に収蔵されていた写本を自由に参照できる立場にあり、これを生かして『千夜一夜』の完全版作り上げたのであろう。彼が主に依拠したのはいずれもさきに言及した、ガランの用いた写本 3 巻、シャヴィの作った写本 4 巻、そしてマイエ写本だと推察されている。ロバート・アーウィンはこのサッバーグの写本作成を、シャヴィ（およびマルドリユス）とならぶ「まやかし」とであると強く断罪している⁶⁵。

たしかにサッバーグは、ありもしない写本をバグダードで筆写作成されたもののように吹聴してみずから編纂したテキストを権威づけた。またたしかにアーウィンが述べるように、サッバーグはこの写本のおかげで金銭も地位も手に入れただろう。しかしマフディの研究の結果わかることは、サッバーグ写本は複数の『千夜一夜』の写本をつきあわせて完成させたものであり、その意味では、自分で作話したりガランのフランス語テキストをアラビア語に訳したりしてアラビア語の物語テキストをみずから（まさに捏造して）付け足

フライシャーがこの作業を引き継いだ。このときにフライシャーはサッバーグ写本を参照したようである。

⁶³ Mahdi, *Part 3*, p.61sq.

⁶⁴ 詩、散文、歴史書などを出し、とくに詩は仏・独・伊・ラテン語に翻訳されていたという。

⁶⁵ アーウィン『必携アラビアン・ナイト』、p.34。

したシャヴィやハビトとは若干姿勢を異にしている。サッバークは利用可能な手持ちの『千夜一夜』のアラビア語写本を組み合わせ、夢の完全^{コンプリート}バージョンを作っただけだとも言える。その作業過程に（つまりサッバークの意図した範囲では）、創作や反訳、および明らかに異質な素材の混入は（基本的には）みられないようである。ただ、シャヴィの作った『千夜一夜』写本を典拠の一つとしたために、ガランの第8巻に出版社が勝手に挿入したペルシア物語「ザイン・アル・アスナム」（これをシャヴィはアラビア語に反訳して自分の写本に収めた）や、「アラジンと魔法のランプ」の物語（これもシャヴィがガランのフランス語テキストから反訳した）が含まれることになってしまったのは不幸であった。ゾタンベールがサッバーク写本のなかに「アラジン」の物語を発見し、ついにこの物語のアラビア語テキストの存在を突きとめることができたことと狂喜したせいで、実はそれが反訳とわかって一挙にサッバーク写本はにせもの扱いとなった。しかしアラジンの話に限って言えば、サッバークはいわばシャヴィ写本を信じて転写しただけであろう。

たしかに自分の編纂した『千夜一夜』を、100年前にバグダードで書かれた写本の転写であると装ったのは、明らかな偽証である。だが奥付にあったとされる場所と日付（バグダード、1703年10月21日）は、ほとんど冗談だったのではないかと考えてもみたくなる。18世紀初頭のバグダードはオスマン帝国の支配下で、完全な荒廃から立ち直りつつあったといっても、往時の盛都ではない。この伝説の都で、ガランの最初の翻訳が仕上がるちょうどその直前に筆写作成されたとは、あまりにもできすぎた話ではある。

第2節 編纂というテキスト生産活動

1) 第二次の文学の場としての『千夜一夜』

『千夜一夜』は人を編纂作業へと誘う。『千夜一夜』は、「創作」とは異なる、すなわちオリジナルなテキストの産出とは異なる、より操作的で二次的な、ある意味ではメタ的なテキスト生産活動へと人を誘う装置であるように思われる。ZER親写本の成立とその後の経緯を、この観点からたどってみたい。

ZER親写本の成立は、ゾタンベールによって18世紀後半か末頃と想定されてきたが、より詳しくはマクドナルドやマフディによって以下のように推察されている。情報源とされるのはドイツ人旅行家シーツェンUlrich Seetzenという人物の日記で、1807年7月10日に「26年前に死んだあるシャイフの編纂したものが現在エジプトに出回っている」との記述がある⁶⁶。こうした情報をもとにマクドナルドやマフディは、後期エジプト系写本と

⁶⁶ MacDonald, [article] “Alf Layla wa-Layla”, (first) *Encyclopedia of Islam*, p.19; Mahdi, *Part 3*. 後者の p.98 に、シーツェンの日記のドイツ語原文が引用されている。

呼ばれるZERの元となる写本は、確かに18世紀頃にカイロで作られたと推測している（マフディはより限定して1775年頃としている）。このシャイフは、かなり安定したかたちで伝承されてきた（シリア系の）最初の200夜分のみを収める『千夜一夜』の写本をもとにして、それを50夜に分割し直し、のこり950夜に、当時自分が見つかることのできたあらゆる物語を書き写して寄せ集めたのだとされる⁶⁷。こうしてこの写本家が付け足して『千夜一夜』に収めた物語たちのなかには、それまでの伝統のなかで『千夜一夜』に収録されたことのあるものもあれば、このときが初めてのものもあった。たとえば（『千夜一夜』とは異質と判断されることもままある）「オマル王」の物語は、すでにみたように初期エジプト系写本およびその他の版でも収録されたことがあったし、逆に、ZERにしか見られない物語も数多くある。シャヴィのようにヨーロッパ人がこうした新編集をおこなうと「まやかし」と非難されるが、ある意味でさまざまな源泉から物語を寄せ集めることは、『千夜一夜』の伝統であったと言える。

ここで、有名な「海のシンドバードの物語」について触れておきたい。この物語はアラブ世界のなかで、独立したかたちで2系統の写本が作られ、伝承されてきた。そのためしばしばこの物語は、「本来の」『千夜一夜』には「含まれていなかった」とされ、ガランがこの物語にまず夢中になり、その後『千夜一夜』の翻訳にとりかかった際に、そこに継ぎ足してしまったことがこの「別系統」の物語が挿入されることになった原因だともされる⁶⁸。ガランは、シンドバードの単独写本をまず手に入れ、これを1698年頃訳し終えたときに、この物語が『千夜一夜』という長大な物語集の一部であるという噂を聞き、総計20年近くにおよぶ自分の長い中東滞在（1670-1675年、1675-1676年、1679-1688年）でもまだ見たことのなかったその物語集の写本を探させたのであった。そうして手に入れた4巻本の写本（現存しているのは3巻）をもとに『千夜一夜』の翻訳を始めたことはすでにみたとおりである。ところでZERでもこの「海のシンドバード」の物語は収録されている。その理由を、ZERの編纂そのものがヨーロッパでの『千夜一夜』の流行を（少なくともいくぶんかは）反映している点に求めることもできるだろう。マフディは、1775年頃に作られたと推察されるZERの共通基底写本（親写本）そのものがヨーロッパ人の要請に応じて編纂されたものだと主張している⁶⁹。したがってとりあえず写本が存在する「シンドバード」については、ガランの紹介以降ヨーロッパで人気を博したこの物語を『千夜一夜』に収めることは、ZER親写本を製作したシャイフにとって当然のことであったと考えられる。し

⁶⁷ MacDonalld, "A Preliminary Classification of Some Mss.," pp.304-321.

⁶⁸ 西尾哲夫「アラビアンナイトの謎」、国立民族学博物館(編)、西尾哲夫(責任編集)『アラビアンナイト博物館』、東方出版、2004年、pp.16-17。なお同様の見方は、西尾『図説アラビアンナイト』、河出書房新社、2004年、p.17にも伺える。

⁶⁹ Mahdi, *Part 3*, p.100.

かしすでにみたように、パリの国立図書館（18世紀当時は王立図書館）が所蔵していた17世紀前半に作られたと思われるトルコ語版の『千夜一夜』にも「海のシンドバード」の物語は、短い形ではあるが⁷⁰入っていたという。ほかにも、18世紀初めのものとする写本に「海のシンドバード」が入っていることが知られている⁷¹。すると、ガランが耳にした、“「シンドバードの物語」は『千夜一夜』という物語集に含まれる”という情報は、決して無根拠なものではなく、『千夜一夜』にこの物語を収める伝統も、17世紀末までのアラブ世界において存在していなくはなかったのだと考えられる⁷²。あとでもみるように、引用の集大成である『千夜一夜』にとって、収録話が独立した写本伝統をもっていることは、なんら矛盾を生じない。『千夜一夜』は収録話がその内部と外部とに同時に存在することを前提とするようなユビキタス（偏在性）の場であるということ、この例からも確認できる。

2) 印刷本の登場と（不可能な）正典化

『千夜一夜』は、写本の状態では「完成」することが最終的な作品の固定にはつながらず可変性を強くもっていたが、ある程度固定化され標準化されて「正典」が誕生するのは、印刷本の出現においてである。これは『千夜一夜』に限ったことではなく、写本伝承によって存続してきたテキストの場合には、一般にみられることである。ただし『千夜一夜』においては、印刷によって「正典」化がおこなわれても、作品の複数的な存在のあり方が維持され、完全な「正典」が画定することがない点が特徴的である。以下、こうした“不可能な正典化”の現象をみていきたい。

完全版の『千夜一夜』のアラビア語印刷本が最初に作られたのは、エジプトにおいてである。カイロ郊外に1822年に創設されたエジプトの国立ブーラク印刷所で、最初の文芸作品として1835年に印刷された。これがブーラク版（ないしブーラク第一版）と呼ばれるものである。おそらく1000部ほどが印刷されたと推察されている⁷³。この刊本

⁷⁰ このトルコ語版写本の465-475夜。Cf. Zotenberg, « Notice sur quelques manuscrits des Mille et une nuits », pp.187-189.

⁷¹ Cf. Zotenberg, *ibid.*, ; MacDonald, *op.cit.* パリ国立図書館所蔵のこの写本（BN, 1721 IV du supplément arabe）は最初の210夜分を含む。現存するその最後の部分にあたる第199-210夜に、短いかたちではあるが、「海のシンドバード」が含まれているという。

⁷² フォン＝ハンマーは、10世紀のマスウーディの『黄金の牧場』での記述を挙げて、『千夜一夜』とは別個に『シマースの物語』と『シンドバードの書』があったことを強調している。ここで言われている『シンドバードの書』*كتاب سندياد* は、「海のシンドバードの（冒険）物語」のことではなく、「シンティパス物語」を指しているであろう。いずれにしても私たちは、むしろ、10世紀の段階では別個に存在していた物語が、しだいに『千夜一夜』という物語集にも帰属させられるようになっていくことがあるということを確認できる。Cf. Von-Hammer, « Sur l'origine des Mille et une Nuits ».

⁷³ Mahdi, *Part 3*, p.240 (note 45). なお、この注の記述のなかで、マフディはブーラク版の

の特質を考えるためにも、まずこの印刷所について概観しておきたい。

この印刷所は、オスマン朝下でエジプトの近代化を推し進めた総督ムハンマド・アリー(1769-1849)の政策の一環として創設されたものである。富国強兵と西欧的な近代化をめざしたムハンマド・アリーは、1815年にイタリアのミラノに使節を送って印刷術を学ばせ、1820年には印刷所の建物を完成、1822年に最初の出版物刊行に至る⁷⁴。この後ブーラーク印刷所では、西欧の科学技術を導入するために多くの翻訳書も含め、自然科学の書物、近代技術の書物、軍事関連のさまざまな書物、教育にかかわる書物が次々に印刷された。1830年までに56冊、1842年までにさらに187冊が刊行されたという⁷⁵。アラブ文学研究者で、ブーラーク印刷所の曆に関心をもつ関根謙治は、この印刷所を、現代エジプトのみならず、広くアラブ世界の知識人を育成したマス＝メディアとして考えていくべきであると指摘している。



ブーラーク印刷所（1958年に建て替えられる以前の、創成期の建物の写真と設計図）
大規模な印刷所であり、いかに重要な国家的事業として書籍印刷が考えられていたかが伺われる

こうした西欧化・近代化・科学技術志向の流れなかで、1836年に、いわば軍事と科学の偏重の傾向に対してバランスをとるかのようになり、初めて文芸書が二冊刊行される。それが『千夜一夜』と『カーレーラとディムナ』⁷⁶である。関根謙司も述べるように、最初に選ばれたのが、「正当な文学史では（少なくとも当時は）抹殺されていた」この二つの作品であり、それがともに言うまでもなく「アラブ本来の文学ではない」ということに対して、も

出版を、支配者エリート層の楽しみと輸出のためであるとしている。

⁷⁴ HP : Bulaq, El-Amiriya Press (<http://www.bibalex.org/bulaqpress/En/Bulaq.htm>) 参照。最初の出版物はイタリア語－アラビア語辞典であった。

⁷⁵ 関根謙治『アラブ文学史』、六興出版、1979年、p.76。

⁷⁶ イブン・アル・ムカッファ Ibn al-Muqaffa' (724-759 頃) が、サンスクリット語で書かれたインドの寓話集『パンチャタントラ』のペルシア語訳を、さらにアラビア語に翻訳した (750 年頃とされる) もの。後世長くアラビア語散文の模範と賞される一方、ペルシア語、トルコ語、モンゴル語、ラテン語などに訳され、インドにも逆輸入された。本論文の趣旨から重要なのは、このインド起源の物語たちはとりもなおさず『カーレーラとディムナ』としてヨーロッパに伝えられて多くの作家たちに影響を与えたことである。

っと注意が払われてもよいだろう⁷⁷（ただし『カリーラとディムナ』の方は、アラビア語の典雅な散文文体の模範として高く評価され、文体的側面からはアラブ世界において文学として価値づけられてきたことは忘れてはならないだろうが）。関根が続けて述べるように、「コーランに次ぐ第二のアラビア語の宝庫」と絶賛されたはずの」ハリリーの『マカーマート』が刊行されるのは、それから14年後である⁷⁸という事実を考えると、ブーラク印刷所での文芸出版の最初の二作品の選択の意味するものは、たんにアラブ世界のアイデンティティの目覚めや、自文化の称揚とはとても言えないと思われる。また、何より、アラブ世界のいかなる偉大な詩作品よりも先んじて、この二つの民衆文学が印刷対象として選ばれたことも軽視できない。

ヨーロッパにならって近代化へと向かうエジプトが、世界に、つまりヨーロッパにすでに受け入れられているものを、みずからの国民に学習させる目的でこの二作品を選択した、と考えることができるのではないだろうか（ちなみに『カリーラとディムナ』は、やはりガランの手によってトルコ語からフランス語に翻訳され、1696年に刊行されて以降、ヨーロッパに広く知られ、ある意味で高く評価されていた⁷⁹）。すなわちエジプトの、ないしはアラブ世界のセルフイメージを、外部からの視点と評価に合わせて鋳直す手立てとして、『千夜一夜』と『カリーラとディムナ』は貴重な文化資源とみなされ、近代的変貌を遂げようとするエジプト人ないしアラブ人にとって適切な学習素材と決定されたのではないか。むしろ、（ヨーロッパに対して）輸出可能なアラブ文化の創出が目指されていたとも考えられるだろう。つまり、ヨーロッパを中核とする世界文化のなかにインテグレートするような文化素材の確立によって、「遅れている」とみなされていた自文化そのものに新たな形姿を与えることが意図されてもいただろう。とすれば、エジプト人自身による『千夜一夜』の印刷出版は、アラブ文化の自己確認・自己肯定のためになされたのではなく、むしろ自分たちの文化のあり方を変貌させるために決行されたのだと考えることができよう。大判のいかにも重厚な（そして典拠とした写本よりも一層洗練された文体に統一されたとされている）『千夜一夜』のテキストの印刷刊行は、外部からのまなざしのもとで自分た

⁷⁷ 関根謙司「アブル・ファトーフ・ルドワーン著「ブーラク印刷所の歴史」（書評）、『イスラム世界』No.11、1976年、p.66参照。

⁷⁸ ブーラク印刷所によるハリリーの『マカーマート』の出版は1850年、イブン・ハルドゥーンの『歴史序説』は1857年である。

⁷⁹ この翻訳は、カルドンヌ Cardonneによって引き継がれ1778年に完成される。以下を参照。

<http://persian.packhum.org/persian/index.jsp?serv=pf&file=90001012&et=85>

(The Packard Humanities Institute, Persian Texts in Translation)

ヨーロッパへの影響の大きさと深さは、たとえば、フランス古典主義の担い手でありのちにフランス国民文学の創出者とも目されるようになったラ・フォンテーヌが、彼の『寓話』*Fables*（1668-94刊行）の執筆に当たって、数々の動物寓話をここから借り受けたことなどによってもたらされた。

ちの新たな文化遺産を建立し、文化の新たなカノンを打ち立てて、自文化を対外的な位置関係のなかで作り変えようとする意識の結果とみることができるのではないだろうか。『千夜一夜』はそこへと立ち戻るべき古典としてではなく、変貌のための契機として価値づけられたのではないかと推察される。

次にカルカッタ第二版についてみてみよう。

ブーラク版に続く完全版アラビア語印刷本であるカルカッタ第二版の製作過程を、マフディは詳細に検討している。

だがその前にまず、カルカッタ第一版と呼ばれる“史上初”の『千夜一夜』のアラビア語印刷本に触れておきたい。インドのカルカッタ（現在はコルカタ **Kolkata** と呼ばれる、ただし以下本論文では便宜的にカルカッタと表記する）がなぜ『千夜一夜』出版の拠点となるのかを理解するためにも重要であろう。

イギリス東インド会社（**British East India Company**, 1600年-1874年）は、1696年にはその拠点のひとつとして、いくつかの小村があるのみであったフーグリー川（ガンガー川〔ガンジス川〕支流）沿岸のカルカッタの地に、のちにフォート・ウィリアムと呼ばれる要塞を建設し始める。これが都市としてのカルカッタの起源となる。18世紀初めには、要塞のまわりに教会やイギリスの商館、イギリス人の居住地、その他のヨーロッパ人の居住地などが作られ、さらに現地人の商館や住居も広がった。イギリスは1756年にムガル帝国軍によってカルカッタのこの要塞を占領されるが、翌1757年、東インド会社の軍隊を擁してプラッシーの戦いでムガル帝国とフランスの軍に勝利し、カルカッタを含むベンガル地方（インド北東地域）の支配をムガル帝国に承認させる。ここにカルカッタはイギリスのインド支配の中心地となる（ちなみにここで言うインド支配とは、広くは、地中海沿岸地域以東のアジア地域の支配を指す）。1773年、イギリスはカルカッタにインド総督 **Governor-General of India**（役職名としては拠点地名をとってベンガル総督）を置く。攻撃によって痛んだ旧要塞に代わって、1758年から新たに建設され始めた新フォート・ウィリアムは、周囲に星型に広がる壮大な稜堡を備えた八角形の要塞として1781年に完成した。その北・東・南面には戦時に備えて広大なオープンスペースが設けられた。内部には政庁や教会をはじめさまざまな建造物が配置された。



左上：旧ウィリアム要塞 右上：新ウィリアム要塞地図 左下：新ウィリアム要塞写真 右下：要塞内部の建物

1800年、総督ウェルズリーLord Wellesleyはこのフォート・ウィリアム内部にフォート・ウィリアム・カレッジFort William Collegeを建設する⁸⁰。ウェルズリーの第一の目的は、多くは15歳から17歳でインドに着任してくる東インド会社の若い文民社員のための教育機関を作ることであった⁸¹が、そればかりでなくこの大学はさまざまな民間人を受け入れるとともに現地人スタッフも雇用し、イギリス人とインド人の学問交流の拠点とされた。また政府の印刷局の出版活動を支えることも重要な役割であった。すでに1784年にはベンガルアジア協会Asiatic Society of Bengalが設立されて東洋に関する諸学問の研究が推進され⁸²、印刷物の刊行もおこなわれていたが、このアジア協会と協同するかたちで、とりわけ数多くの翻訳作業が展開された。その数、数百冊とも数千冊とも言われる。イギリスの書物を現地諸語に翻訳する一方、サンスクリット語、アラビア語、ペルシア語、ベンガル語、ヒンディー語、ウルドゥ語からヨーロッパ諸語への翻訳もおこなわれた。またこれらの言語での印刷出版活動も創設した。

⁸⁰ フォート・ウィリアム・カレッジについては、以下のHPの項目が参考になった。

http://banglapedia.search.com.bd/HT/F_0170.htm

⁸¹ ペルシア、アラビア、ヒンドースタン、サンスクリット、現地諸語など12の学部が作られ着任した若者はまず2年間この大学で、言語と植民地行政についての教育を受けたのち実務についた。

⁸² フォート・ウィリアム・カレッジのスタッフは、優秀な東洋学者としてヨーロッパでも注目された。ここから育った著名な東洋学者も多い。

このフォート・ウィリアム・カレッジで、1814年と1818年に、東インド会社の士官officerや文民社員たちにアラビア語を教育するための語学教科書ないし副読本⁸³として、1巻ずつ計2巻、アラビア語版『千夜一夜』が作られ、印刷刊行された⁸⁴。これが、カルカッタ第一版とよばれる印刷本である。各巻それぞれ100夜ずつを収めたものであった⁸⁵。

だが1818年にイギリス議会は、インドを（国家の）直轄植民地とし、東インド会社のための教育機関であったフォート・ウィリアム・カレッジは、イギリス国家によるインド経営が強力に展開されていくなかで次第に衰退していく。1828年に着任したベンティンク Lord William Bentinckは、現地の諸言語を用いた出版プロジェクトへの資金援助を停止し、1830年には行政と教育の一切を英語化することを決定する。しかし予算難に苦しみながらもカレッジでは、より近代的なインド支配に貢献する学問・教育活動のあり方が多面的に探られ、東洋の諸言語のテキストの保存や出版も続けられた。時代は西欧の一元的支配へと急速に傾斜しつつあり、植民地経営には現地人の英語化と文化の西欧化を推進することが必要との見解も強く、現地の文化や言語の保存は危険だとの反対意見もあったが⁸⁶、紆余曲折の議論の末、『千夜一夜』の出版が模索され始める。

1836年に『千夜一夜』の4巻本の完全写本（もとの所有者の名をとってマカン写本と呼ばれる）がカルカッタの出版社の手に渡り⁸⁷、その後ベンガルのアジア協会での慎重な審議と、ヨーロッパに知られている種々の写本との比較検討を含むこの写本の徹底した吟味がおこなわれた末に、出版が決定される。こうした経緯からも、カルカッタ第二版の出版に携わった人たちは、編纂者として名を残すベンガル政庁の外交官で学者でもあったイギリス人マックナーテン William H. Macnaghten (1793-1841)⁸⁸を初めとして、単に入

⁸³ 後述するように東インド会社ではすでに1776年にも内部教育のためのアラビア語文法書 (John Richardson, *A Grammar of the Arabic Language*) が作られ、わずかな断片ではあるが購読用に『千夜一夜』のテキストも収められていた。この文法書が印刷されたのはロンドンである。

⁸⁴ *The Arabian Nights' Entertainments; In the Original Arabic. Published under Patronage of the College of Fort William; by Shuekh Uhmud bin Moohummud Shirwanee ul Yumunee, Calcutta, vol. I, 1814; vol. II, 1818.*

⁸⁵ シリア系の写本であるラッセル写本（1750年から1771年にアレppoで筆写といわれる）に依拠。ただし第2巻では、「海のシンドバードの物語」が付加されている。

⁸⁶ Cf. Mahdi, *Part 3*, pp.109-112. マフディはこの経緯を詳細にたどっている。

⁸⁷ ブーラーク版の典拠となった ZER の一つと思われる。マフディに拠れば、1827年に死去したアレクサンドリアのサルト Salt という人物から相続人を経て、ロンドンでこれを購入したイギリス人マカン少佐 Turner Macan の手でカルカッタに持ち込まれ、マカンの死亡によって遺品となったこの写本が1836年に Mr. Brownlow という人物に買い取られる。

⁸⁸ しばしばカルカッタ第二版は、彼の名をとってマックナーテン版と呼ばれる。彼はフォート・ウィリアム・カレッジの歴代の学者の中でも最高のペルシア語・アラビア語の使い手であり、優れた言語学者であったとされる。法律も専攻し、イスラーム法に関する研究を数々出版。1830年から36年までの時期には政治にも携わった。『千夜一夜』のカルカッタ第二版は、植民地行政の政治的動向を多分に反映した、きわめてポリティカルな出版物だったと考えること

手した完全版写本に依拠するのではなく、できるだけ多くのさまざまな写本の合成をおこなうことこそ、より「完全な」ヴァージョンを達成する道であると考えていたと推察される。かくして1839年から1842年にかけて、イギリス人による出版物として『千夜一夜』のアラビア語印刷本が刊行をみた。これはフォート・ウィリアム・カレッジが東洋学の拠点として機能した最後の時期の出版物であるとも言えるだろう。この印刷本の存在はヨーロッパ人にとっては情報が伝わりやすいものであったが、イギリスへの輸送船が沈没したこともあって、せっかく印刷刊行されたにもかかわらず大量に出回ることにはならなかった。

なお、カルカッタ第二版での編纂作業は、収録話の選択や構成配置にたいしてはほとんどおこなわれていず、もっぱらテキストの文面のアレンジ（目次の作成や物語の切れ目の可視化などによる“わかりやすさ”への配慮や、ストーリー上の不整合を補い自分たちの意識からみて“完成された”かたちをめざした“校訂”作業）に向けられたと言ってよいようである。ブーラーク版と比べて、収録話に違いがあるのはただ1話のみであり、そのほかは物語の種類も配置も同一であるところをみると、カルカッタ第二版は、底本としたZER写本の一つ「マカン写本」の構成（収録話の種類とその配置）には忠実であったと考えられる。

主要印刷本の概観の最後に、現在ではすっかり信用の失墜したブレスラウ版について若干言及しておこう。すでに触れたように、ドイツのブレスラウ（現在は、ポーランド国内のブツワフ）では、マクシミリアン・ハビヒトMaximilian Habicht (1775-1839) と（その死後、跡を継いだ）ハインリッヒ・L・フライシャー Heinrich Leverecht Fleischer が（ハビヒトがアラビア語に反訳した話も含む）かなり突飛な寄せ集めの感の強い『千夜一夜』のアラビア語印刷本（ブレスラウ版）を1824-1843年にかけて出した。全12巻で、第1-8巻（1824-1838）がハビヒトの手で出され、第9-12巻（1842-1843）はフライシャーが完成させた。ハビヒトは独自に入手した「チュニジア写本」をもとにした翻訳であることを謳っていたが、さきにみたように20世紀に入ってからその真贋が問われるようになり⁸⁹、現在では架空の存在であったことがつきとめられている。しかし19世紀前半においては、ハビヒトは東洋学の中心であるパリで研鑽を積んだ本格的な学者の名声を獲得しただけに、この版は『千夜一夜』に携わるヨーロッパの専門家には大きな影響を与え

ができそうである。こうした観点からも、マフディが掘り起こした、ベンガル・アジア協会での審議過程の詳細は非常に興味深い。なおマックナーテンは、1841年、『千夜一夜』の刊行終結をまたずに新たな任地のアフガニスタンで戦死した。

⁸⁹ MacDonald, “Maximilian Habicht and His Recension of the Thousand and One Nights”, *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1909, pp.685-704.

た。まず刊行の開始が1824年であり、ほかの完全版（ブーラーク版は1835年、カルカッタ第二版は1839-42年）よりもはるかに先んじていたことによる独占的な影響力がある。またブーラーク版、カルカッタ第二版が、ヨーロッパ人にとっては入手がきわめて容易とは言いがたい状況にあったことも、ブレスラウ版の影響力の増大につながったであろう。

以上、アラビア語印刷本についてみてみたが、原典印刷本の刊行が、唯一のカノン・テキストの形成にはつながらず、むしろ『千夜一夜』のテキスト的現働化の複数性がかえって画定される事態となったことをみることができた。

次に翻訳版についてみてみよう。

すでに述べたように、ガランによる翻訳刊行以降、これにない物語を探索し付け加えていこうとする補遺 supplement への情熱があった。

19世紀になって完全版のアラビア語印刷本（すなわちZERの印刷版）が現れる直前に、ZERの写本からの翻訳があらわれた。オーストリア人の東洋学者フォン＝ハンマー Joseph von Hammer-Purgstall (1774-1856)⁹⁰による大規模な補遺である。彼は、カイロで“完全版”であるいわゆるZER写本の一つを入手し、そのなかからガランにはなかった物語をフランス語に訳出した。それは怪しげな由来の、あるいはさまざまな出所のテキストからの寄せ集めではなく、正真正銘の『千夜一夜』写本からの紹介であったために、強い関心を集めた。フォン＝ハンマーのテキストは散逸したが1823年にドイツ語訳3巻が、さらにその英訳が1825年に、フランス語への再訳が1828年に刊行された⁹¹。この時点ではガランの物語集に対する「外伝」と位置づけられたであろうこの抜粋の補遺物語集の出版は、『千夜一夜』の「本体」という概念そのものを可変的なものとイメージさせるのに十分であった。

さて、上記のアラビア語印刷本をもとに次々と出されるヨーロッパ語への翻訳においても、再編纂の情熱はさらに一層高まるばかりである。

1825年にエジプトに渡った英国人レイン⁹²は、現地でいくつか写本を目にするのと同時に、エジプト通として1836年にエジプトで刊行されたブーラーク版（ヨーロッパ人にとって

⁹⁰ フォン＝ハンマーはアラビア語、トルコ語、ペルシア語に堪能な、ドイツ語圏随一の東洋学者として活躍した。1799年にコンスタンチノーブルのオーストリア大使館に赴任し、1807年に中東から帰国する。その後学者として多数の著作を残した。『千夜一夜』に関しては、本論文でもすでにみたようにペルシア起源を主張し、イギリスのレインと激しく対立した。

⁹¹ ドイツ語訳はZinserlingによる (*Die noch nicht übersetzten Erzählungen der Tausaend un einen Nacht*, 1823, 3vols)。その英訳はLambによって1826年に、フランス語訳はTrébutienによって1828年にやはり3巻本で出版された。

⁹² レインはもともと石版画家であり、彼の翻訳本には、物語世界を髣髴とさせるさまざまな版画家による版画挿絵が600点以上も用いられて、ヴィジュアルな情報と楽しみに満ちている。

はいかにも貴重な現地資料としての価値をもつものであった) を底本として、英訳本を刊行した。レインの『千夜一夜』 *The Thousand and One Nights* (1838-1841) は、基本的にはブーラク版に依拠しながらも、同時にカルカッタ第一版とプレスラウ版も適宜利用して、彼なりの充実を図っている。こうした点にも、またとりわけ収録物語を抜粋して 3 分の 1 ほどの数だけに抄訳した点にも、レイン独自の編纂意識が強く発揮されていると言える。

なお、カルカッタ第二版の作成と平行するかたちで英訳が準備されたことにも一言触れておこう⁹³。東インド会社のイギリス人たちによってカルカッタ第二版が準備される過程で、その底本であったマカン写本からトレنزHenry Torrensが英訳を開始していた。インドの行政官でもあり著述家でもあったトレنزは、フランスのシルヴェベストル・ド・サシーやドイツのシュレーゲルがマカン写本を怪しいテキストと攻撃したのに対して、(イギリスの東洋学の拠点であるベンガルのアジア協会の権威をかけて) その価値を擁護する論文⁹⁴を執筆したほど、カルカッタ第二版の出版には深くかかわっていた人物である。しかしトレنزは、1837年にインド・ベンガル政庁の事務局長に任命されたために翻訳作業を中断し、さらにアラブ研究者として名を高めていたレインがすでにエジプトで刊行されているアラビア語印刷本をもとに英訳の刊行作業を進めていることを聞き知って翻訳を放棄する。かくして最初の 50 夜分を収めた第 1 巻だけが 1838年にイギリスで刊行され、その後が続くことはなかった。こうした経緯からも、激しい競争意識のもとに『千夜一夜』のテキストをめぐる多数のアプローチが試みられてきた状況が推察できる。

ペインJohn Payne⁹⁵の英訳版 *The Book of the Thousand Nights and One Night*, 9vols., 1882-84 と、彼の訳をかなり引き写しに利用しているバートンRichard Burton⁹⁶の英訳版 *The Book of the Thousand Nights and a Night*, 10vols., 1885 は、ともにカルカッタ第二版に基づきながら、部分的にはほかの版も用いている点、そして、すでに触れたように、とりわけカルカッタ第二版に収録されていない物語たちを「補遺」として精力的に収集・紹介した点に、『千夜一夜』のより「完全」なかたちをみずから編集したいという

⁹³ マフディの研究を参照した。Mahdi, *Part 3*, chap.3, (esp. p.119sq.).

⁹⁴ Henry Torrens, “Remarks on M. Schlegel’s objections to the Restored Editions of the *Alif Leilah* or *Arabian Nights’ Entertainments*,” *Journal of Arabic Society of Bengal*, No. 6, 1837, pp.161-168 [reprinted in *The Asiatic Journal and Monthly Register* (London), No.25, 1838, pp.72-77].

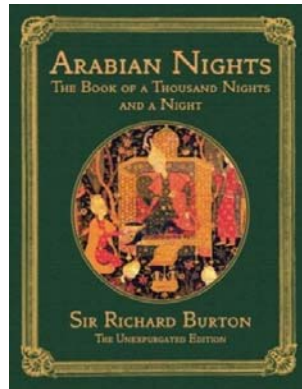
⁹⁵ イギリスのペイン(1842-1916)は法律家として出発し、詩人および翻訳家として活動した。ボッカチオの『デカメロン』の翻訳(1886年)でも知られる。多くの著作を限定出版方式で刊行した。彼の『アラビアン・ナイト』もその一つであった。

⁹⁶ バートン(1821-91)は、ペルシア語、アラビア語、アウガニスタン語、ヒンドゥースタニ語など東洋諸語に通じ、アジア、アフリカの各地を旅行、探検した。なかでも 1853年にイスラーム教徒を装って、メッカへの巡礼を果たしたことで有名。多くの著作を残している。

情熱があらわれている⁹⁷。実はバートンは、自分で話を一つ作ってこっそり『千夜一夜』の本体に紛れ込ませるといふ悪戯もやっている⁹⁸。



アラブ風の衣装を着たバートン（肖像画）



バートン版『千夜一夜』



バートン晩年の肖像画

フランス人マルドリユス Joseph Charles Victor Mardrus (1868-1949)⁹⁹の仏語訳 *Le livre des mille nuits et une nuit*, 1899-1904, 16vols. に至っては、ブーラク版に拠っているとは言ふものの、翻訳というよりは翻案であり¹⁰⁰、文体や物語展開を自由に改変する以外に、収録物語そのものをかなり大幅に操作したものである。しかしそのタイトルに「アラビア語原典からの逐語完全訳」を謳っていたことから、フランス人読者にとっては、ガラン以降初めて『千夜一夜』の本当の姿が明かされた翻訳版として熱狂的に支持された。医学博士でもあり、カイロ生まれで中東世界を広く旅行していたマルドリユスは、信頼しうる学識にあふれた東洋通としてパリで名を馳せた。『千夜一夜』の翻訳はマラルメの勧めによるものといわれ、そのマラルメやブルースト、ジッドら彼と懇意の文学者たちの絶賛も、また一流の画家たちによる挿絵¹⁰¹を伴ったさまざまな版の出版も、マルドリユス訳の

⁹⁷ Payne, *Tales from the Arabic*, 1884, 3vol. さらに 1889 年に 1 巻を追加 (orphan stories を写本から訳出)。Burton, *Supplemental Nights*, 1886-88, 6vols.

⁹⁸ 「アブー・ハサンがおならをした話」How Abu Hasan brake Wind (バートン版第 410 夜内)。なんとマルドリユスはこの話を彼の仏訳版に収録している(Mardrus, vol.10, pp.161-165)。

⁹⁹ マルドリユスはグルジアからの亡命一族の出でカイロ生まれ。バイルートで教育を受けたあとパリで医学博士となる。

¹⁰⁰ 現在では周知の事実であるが、たとえば以下を参照。前嶋信次「千夜一夜物語、作品解説」前嶋信次(杉田英明編)『千夜一夜物語と中東文化』(東洋文庫 669、前嶋信次著作選 1)、平凡社、2000年、pp.16-17。

¹⁰¹ レオン・カレ Léon Carré、ヴァン・ドンゲン Van Dongen、アンドレ・ドラン André Derain らが有名。ほかにシュミット François-Louis Schmied、ブルデル Antoine Bourdelle、ル・ドゥ Picart Le Doux ほかさまざまな画家・芸術家の作品が知られる。Cf. Dominique Paulvé & Marion Chesnais, *Les Mille et Une Nuits et les enchantements du Docteur Mardrus*, Musée du Monparnasse-Éditions Norma, 2004.

権威化を助長した。この斬新なマルドリユス版の登場とその影響力によって、『千夜一夜』という作品のあり方は一層混乱を拡大することになった。ニキータ・エリセーエフの著作¹⁰²から近年に出た『アラビアンナイト百科事典』¹⁰³まで、マルドリユス版が収録している物語を原典と比較対照し、新規挿入された物語がどれであるのか、そしてその出所を確認する作業は、研究の重要な課題の一つとなっているほどである。実際、本論文の巻末資料4「マルドリユスの省略した物語」を参照してもらえばわかるように、マルドリユスはブーラーク版と比べて100篇近くを削除し、逆に、ヒンドウスタニーの物語などを含めさまざまな出所（不明のものも含めて）から100篇ほどを付加している。

最後に、もっとも原典に忠実で学術的信頼に値する翻訳として名高いリットマン Enno Littmann (1875-1958) のドイツ語訳 *Erzählungen aus den Tausendundein Nächten*, 1921-28, 6vols. についても触れておこう。実はこの学術校訂版も、底本とするカルカッタ第二版を忠実に翻訳しようとするだけでなく、これまでの伝統でもみられたように夜の分け方を操作して余地を作り、「アラジン」や「アリババ」を初め、ガランやハビヒトの版で紹介されてきた数多くの物語を途中に挿入している。

『千夜一夜』はそれに携わる人に編纂意欲を掻き立ててやまない。しばしば問題とされるように、「商人と魔王との物語」のなかの第三の長老の話は、シリア系の写本では欠落している。そのためアラブ世界での写本伝統においても、ヨーロッパでの翻訳版においても、ここに何らかの物語を補填しようといくとおりもの試みがなされてきた。しかし一方では、欠落をそのまま踏襲する伝統もあり、どのかたちにするべきなのかが定まらない。むしろこの不安定さが、人を『千夜一夜』の新たな編纂という作業に誘い込むのであり、『千夜一夜』はそれを書き直す人にとってはむろんのこと読者にとっても、エディターとしての欲望を駆り立て、『千夜一夜』の生成に参画させるのである。

3) 収集編纂にみる反オリジナリティの原理

歴史的生成過程を考えてみた場合『千夜一夜』が、その唯一の「起源」となるような特定の時代や場所をもたないということはすでに確認した。ここではさらに別の面からこの作品が、その初期形態においてすでに、テキストの「起源」という発想を無縁としている点を見てみたい。

『千夜一夜』という物語集の特徴の一つは、この作品がまさに物語を「集めた」ものとして、すなわち物語「集成」としてあるということに認められる。収集によって成り立つ

¹⁰² Nikita Elisséeff, *Thèmes et motifs des Mille et Une Nuits : essai de classification*, Institut Français de Damas (Beyrouth), 1949.

¹⁰³ *The Arabian Nights Encyclopedia*, 第2巻末の「対照表」参照。

この物語集は、それを構成する一つ一つの物語が、オリジナルなものではないということ
を基本条件としている。つまり『千夜一夜』という文学作品は、作品の独自性という近代
的＝ロマン主義的な文学観と真っ向から対立する原理に基づいて作られてきたのである。

『千夜一夜』はおそらくその前身ともいえるべきペルシア語の『ハザール・アフサーン』
の時代からすでに、既存の物語の寄せ集めを原則として形成されてきたようである。枠物
語自体がインド由来とされるどこか遠い起源の話型を借り受けたものであるし、この枠の
なかに収められる物語も、「創作」ではなく、すでに存在する物語を転記したものであるこ
とが原則となってきた。

さきのイブン・アンナディームの記述のなかで、『千夜一夜』と関連する興味深い事例
が付記されている。それによると『ハザール・アフサーン』を祖として娯楽のための物語
の集成がいろいろ作られてきたとのことであり、実際、9-10世紀にはアッバース朝下で物
語集が盛んに作られたようである。さて、このイブン・アンナディームの紹介するところ
では、そうした物語集のなかにはこのような例もあるという。アブー・アブド・アッラー・
ムハンマド・ブン・アブドゥース・アル・ジャフシャーリー¹⁰⁴という政府の高官でもあり
文人でもあった人物¹⁰⁵は、——“千の物語”を意味する『ハザール・アフサーン』ないしは
『アルフ・フラーファ』という書名どおりに——、千の物語を集めようとした。

彼はアラブ人、ペルシア人、ギリシア人、ほかの人々の物語のなかから千の物語を選
び出そうと意図した。それぞれの部分（物語）はバラバラで、互いはつなぎあわされ
ていなかった。彼は物語師たちを面前に召還しては、彼らが知っている物語や得意と
する物語のうちの最良のものを集めた。また彼は、物語やお伽噺を集めた本のなかか
ら自分が気に入ったものをどんどん選んだ。彼は高位の人であったので、彼のために
480夜分が収集された。各々の夜がひとつの完全な物語をなしており、50ページ前後
の長さを含んでいた。千の物語集を完成するという計画を成し遂げる前に、死が彼を
見舞った。¹⁰⁶〔下線強調引用者〕

ここで示されているのは、この手の物語集は、すでに存在する物語を「選び」、「集める」
ことによって作られるということである。その起源がアラブ人以外のよその文化圏に及ん
でいることも明確に記されている。ともかく物語集の編纂にあたっては、物語り手に面白
い話を思いつかせ、発案させ、創作させることを製作者は考えていない。もともと物語師

¹⁰⁴ ロバート・アーウィンによれば 942 年没。『必携アラビアン・ナイト』 p.116

¹⁰⁵ Bayard Dodge の注記による。イブン・アンナディームの記述では、『大臣たちの書』なる
書物の著者であることが紹介されている。 *The Fihrist of al-Nadīm*, p.714.

¹⁰⁶ *Ibid.*

(ラーウィー〔口伝師〕、ムサーミル〔夜話の語り手〕)は物語を作る人ではなく、覚えた物語を再演する人である。イブン・アンナディームによる上の記述には、彼がすでに存在する書物すなわち書かれた物語集から選出をおこなったことも明確に記されている。この政府高官の企画した物語集は、上に「各々の夜がひとつの完全な物語をなしており」と記されているように“一夜完結方式”である点で、構成の根幹において『千夜一夜』の伝統とは異なったものとなっているが、『ハザール・アフサーン』に始まるおとぎ話集のモットーが、すでに存在する物語、すでに誰かが記憶し、繰り返し演目とされてきた物語、それらもできればすでにテキストとして存在する物語を蒐集することである点をここで私たちは確認したい。この伝統においては、新作を作らせて集めるのではなく、すでに存在する物語を探し出し、コレクションすることに価値が見出されている。つまり、収集すべきテキストは、オリジナルな創作であることよりも、他のテキストを起源とする再現ないしコピーであることの方が重んじられるのだ。ここには、反復的存在としてのテキストという概念と、それに対する明確な価値づけが働いている。

『千夜一夜』は本来的に既存の物語の「選集」である。しかも引用元を明確化せず、変容を加えながら収録するスタイルをとるため、引用元(起源)を権威化することもない。

『千夜一夜』はテキストの起源という概念をそもそも不問とし無効としてしまうような間テクスト性(インター・テクスチュアリティ)の大海であると言えよう。

この『千夜一夜』の借用主義、言い換えれば反オリジナリティの精神は、『千夜一夜』の歴史のなかで確実に踏襲されてきた。中世アラブ世界での発展期でも、物語はさまざまな典拠から借用されて添加されてきた。またヨーロッパに紹介されて以降においても、『千夜一夜』の編纂にたずさわった者は、物語を渉猟し収集する活動を展開してきた。だからこそ『千夜一夜』では、作話(『千夜一夜』のために物語を創作すること)が異端視され、出所のわからない物語や少なくとも(『千夜一夜』中の物語として知られる以前に)すでに存在していたことが確認できない物語は、つねに問題視されてきたのである。たとえば入手した写本を訳し終えてしまったガランが、ハンナから聞いたり提供されたりした物語をもとにして追加した物語のなかでも、写本がみつからないあの「孤児の物語」と呼ばれる物語たちがそれにあたる。これらについては、その「信憑性」が問われている。これに対して、ガランが第7巻以降の巻に追加して収めた物語の中でも、同様の話が写本などのかたちで存在していることが確かめられる場合であれば、「正当」とみなさる。実際、ガランが付け足した物語のうちでも、写本のある物語はそれを土台として、18世紀後半に作られ、その後定本化された1001夜を備えた完全写本(ZER)に収められたが、アラビア語写本のないもの(たとえば「アラジンと魔法のランプ」の物語や「アリババと四十人の盗賊」の物語)は、この版のなかに場を占めることができなかった。

物語は他所^{よそ}から受け取り、それを引き受けるというかたちで自分のものとすべきだ、という発想が『千夜一夜』という作品自体が原理化している編集方針としてある。こうした物語観は、『千夜一夜』の内容にも色濃く反映している。まずシャハラザードは「すでにいろいろの書物・年代記・昔の諸王の伝記・過去の諸民族の物語などを読んでいるし、そのかみの諸民族や、先代の帝王たちに関する史書、および詩集類など一千部も集めたといわれていた」と紹介されている¹⁰⁷。そして彼女は、最初の晩、「幸多くいらせられます国王さま、このようなことが伝えられてきました」... حكي ايها الملك السعيد انه (下線強調引用者)と切り出して物語を披露する¹⁰⁸。すなわち、シャハラザードは自分が案出した物語を語る創造的な語り手ではなく、さまざまな書物を収集し、すでに書物で読んだ物語たちを記憶していて披露する媒介的な語り手として設定されているのである。物語の続きを聞くために翌晩までの延命を許され、新たな夜に語り始めるときのシャハラザードの決まり文句も、「幸多くいらせられます国王さま、このように聞き及んでおります [=私に伝わっております]」... بلغني ايها الملك السعيد ان (下線強調引用者)である。さらにこの言葉は、シャハラザードが(夜の途中で)新たな物語を始めるときにも定型句として用いられている。テキストが、そして^{スーパー・ナレーター}超人的な語り手としてのシャハラザードが、他者を起源として到来した物語を伝えていることを毎晩繰り返し強調している、という点に注意したい。シャハラザードが超人的な語り手であるのは、物語創作能力によってではまったくないし、卓越した話術によるのでもないだろう。書物を通じて個人を超越した「過剰記憶」に身をゆだねることができる傑出した受動能力によって、シャハラザードは一人の人間であることを超えたスーパー・ナレーターとなるのである。

また収録話のなかにも、王たちが、物語の収集を命じているものや ([153a]「サイファルムルークの物語」¹⁰⁹)、十字軍との戦いを描いた長大な [8]「オマル王」の物語のなかで、戦闘に疲弊した王が(慰みに物語を求めたアレクサンダー大王さながら)周囲の臣下に、記憶している物語を披露させるという設定もある。『千夜一夜』の世界には、自分の機知で物語を創案する語り手は基本的にはいない¹¹⁰。自分の経験してきた事柄を物語るケースは

¹⁰⁷ 平凡社東洋文庫、第1巻、p.13、序話。

¹⁰⁸ カルカッタ第二版での記述。 حكي(hukiya)は^レを従えて、英語で言えばIt is reported (that...)に相当する表現を作る(三人称単数男性、受動態完了形)。ブーラク版では بلغني(balaghani)「私に伝わっております」という表現を用いている(自動詞「伝わっている」+「私に」。ちなみに、これをハッダウィは It is saidと受身的に、ブレイヤード版は« on raconte »と非人称的に訳している)。どちらの表現も『千夜一夜』の定型句であるが、いずれも語り手が創作主体でないことを明示する言い回しである。本論文第7章の議論を参照のこと。

¹⁰⁹ [153]「ムハンマド・サバーイク王と商人ハサンの物語」(第756夜~778夜)の枝話。

¹¹⁰ この点で、[5]「せむしの物語」のおしゃべりな理髪師は注目すべき境界例となっている。理髪師自身は一番目から六番目までの兄たちをめぐる話を報告するという体裁をとっている。この点では彼は物語の媒介伝達者としてふるまっているのであるが、その話があまりにもばか

ままあるが、この場合も、語り手は、物語を創出しているのではないことに注意したい。経験を語る者は、出来事を生み出しているのではなく、(少なくとも形式上は) 経験を言語的に反復再生産しているのだと言えるからである。『千夜一夜』における物語は、創出による生産物ではなく、反復による産物なのであり、なにもものかの反復であることにこそ「正当性」が、文化的価値が見出されているのである。

詩についても言及しておきたい。ZERをもとにした現在のテキストでは、『千夜一夜』のテキストの中に多くの詩が挿入されている。写本によっては詩のないものもあり、またガランのように翻訳の際に詩を省いたケースもある。しかし多くの版では物語テキストに詩が挿入されている。これは歴史的にも、あとから、まさに「挿入」されたものだと考えられている。ホロヴィッツの研究によれば、ZER版『千夜一夜』のテキストには約 1420 の詩の断片がある (うち 170 は繰り返して使用されている)。おおむね 1 行から 4 行のごく短いもので、それはすべて既存の詩からの借用・引用であると考えられている。そのうちの 4 分の 1 については作者を突きとめることができたが、多くは 10 世紀から 14 世紀の詩人たちの詩篇からとったものだった¹¹¹。そして『千夜一夜』の伝統のなかでは、挿入される詩は、編纂者や口演者によって自由に追加されたり、入れ替えられてきたと思われる¹¹²。

以上でわかるように『千夜一夜』では、挿入される詩もまたオリジナルではないことを原則としている。日本の『土佐日記』や『堤中納言物語』のように、歌物語が詩歌の創作の舞台となり、詩歌の発表・提示の機会となっているのはこの点で大きく異なる。『千夜一夜』の場合は、すでに人口に膾炙した詩のフレーズを織り込むことで、とりわけ口演の際に、物語の聴き手の備えている知識のストックに訴えかけて聴き手を物語に惹きこもうとしたことが、テキスト上に詩が残される伝統を形作ったのだと思われる。口演では、楽器を伴っての場合もあれば、肉声のみの場合もあるだろうが、詩を朗唱することによって

ばかしく、法螺めいているので、王も理髪師の物語をほんとうに兄たちが経験したことを伝えた話だとは思ってないふしがある。理髪師の奇想天外な馬鹿ばなしを喜ぶ王は、ある意味では理髪師の創案の機知を評価しているともいえる。しかしあくまでも、理髪師は「知っている話」(すでに存在している話を聞き知ったもの)を披露するという条件でのみ物語の権利を与えられていることに注意しておきたい。

¹¹¹ Josef Horowitz, "Poetisch Zitate in Tausend und eine Nacht", in Gotthold Weil ed., *Festschrift Eduard Sachau zum Siebzigsten Geburtstage*, Reimer (Berlin), 1915, pp.375-378. とりわけよく引かれているのが、アッバース朝期のムタナッビー al-Mutanabbī (10 世紀)や、アイユーブ朝のカイロで活躍した 13 世紀のバハール・ディーン・ズハイル Bahār al-Dīn Zuhayr であるという。ともに後世にまでよく知られた大詩人である。Cf. Littmann, «Alf Layla wa-Layla», p.375.

¹¹² Cf. Geert Jan van Gelder, "Poetry and the Arabian Nights", in *The Arabian Nights Encyclopedia*, p.14.

物語り師は音楽的な興を物語に添えたのだと推察される。したがって詩は新規のものよりは、聴き手の多くが共有するものであることが求められたのだろう。『千夜一夜』においては詩は、たえず反復されてきたものの反復的な顕われとしてあるのであり、「反オリジナリティ」の象徴的な要素をなしている。

物語テキスト内での詩の導入の仕方にも、詩篇が「オリジナル」なものではないことが多くの場合に強調されている。しばしばみられるのは、「それは詩人が次のように歌ったのにも似ていたのです」（第9夜）、そのさまは「詩人がつぎのように歌ったようでありました」（第15夜）という、すでに存在する詩句の引用であることを明示した導入の表現が用いられていることである。これもまたたとえば『土佐日記』のように、主人公が物語内のシーンにおいて、その場で創作吟唱という設定をとるのとは異なっている。詩は、物語の地の文の側が、登場人物の心情を察したり情景の意味を明示するために採用したものであることが多く、また、主人公が唱える場合であっても、創作としてではなく、記憶していた詩句を口ずさんだという設定になっている場合がほとんどである¹¹³。

『千夜一夜』においては、物語を語る登場人物は、自分の語る物語の「起源」として自分を認識することがなく、詩を吟じる場合もこれは同様である。語る人物たちは、語られるテキストの借用者であり、そのテキストを媒介伝達する通過装置である。そしてそこにこそ価値が見出されている。『千夜一夜』のテキスト自体も同様の性格をもっている。『千夜一夜』は文学創作の場ではなく、^{アーカイブ}保存庫なのだ。『千夜一夜』の収録話のむすびにしばしば用いられる、物語をお気に召した王がこれを金の文字でしたためさせて書物とし宝物庫に収める（つまり宝物として収蔵された物語書は^{オリジナル}原本でもなければ、おそらくその物語を伝える唯一の書でもないということになる）というモチーフは、物語収蔵庫としての『千夜一夜』の伝統にメタ的に言及したものとして受けとることができる。起源やオリジナリティに絶対的な価値を置く姿勢を離れると同時に、この「^{アーカイブ}保存庫」の概念が重要となるのは、本論文でもすでにジャック・デリダの論考をめぐって触れた点でもある。いずれにしても、『千夜一夜』が「起源」への価値付けと距離をおくことによって、それ自身の歴史的生成においても、またその内容においても、借用性や反復性を全面的に肯定する姿勢を示してきたこと、それによってまさに物語の「過剰記憶装置」となってきたことに注意したい。

¹¹³ [19]「アリー・ビン・バッカールとシャムス・ウン・ナハールとの物語」（第153～170夜）のように自分の気持ちをみずから詩に詠んで、詩歌で気持ちを交換しようという設定になっている例もある。ただしその場合も、基本的には、既存の詩からの引用ないしは変形によって詩句が提示されているとみてよさそうである。

第3節 移動する作品

『千夜一夜』という物語集が、場所を変えながら存続してきたことはすでにも若干みた
が、この点をもう少し検討しておきたい。

もともとペルシアで存在していた物語集の翻訳移入によって始まったらしいこの物語集
は、バグダードに拠点を移して成長する。ここでさまざまな物語を付加する。

<バグダードの歴史>

簡略歴史年表

762 バグダード建設開始。
最盛期（8世紀末～）9～10世紀初め、
cf. 第5代カリフ、ハールーン・アルラシ
ード（在位786-809）
10世紀半ば以降荒廃化
1258 モンゴル軍の侵入による破壊、
市民80万人虐殺、地方小都市に
→イスラム世界の中心はマムルーク朝下のカ
イロに移動

15世紀初め ティムールによる略奪
15世紀半ば 廃虚同然、
オスマン帝国の支配下に
16世紀人口1万5000人

1921 イラク王国樹立、首都に
1955 イラク共和国の首都に

アッバース朝の都 バグダード

【場所】 ティグリス川中流西岸
【建設】 第2代カリフ・マンスール
762～766年に建設
【正式名称】 マディーナ・アッサ
ラーム(平安の都)
【構造】 円形都市
内部の施設: 黄金門宮、大モスク、
諸官庁、カリフ一族の館
など
【人口】 約150万(9～10世紀)

しかし、バグダードが荒廃していくにしたがって、『千夜一夜』は流行の場所すなわち生成
の場所を移動させる。アラブ＝イスラム世界の中心地のひとつとしてたえず栄えてきた
シリア方面と、10世紀後半に建設され始めたカイロ（969年のファーティマ朝のエジプト
征服によって建設され首都となる）にその拠点は移ったと考えられる。ダマスカスを中心
とするシリアとカイロこそは『千夜一夜』の諸写本の発見場所でもあり、また物語内部で
も（バグダードやバスラにならんで）建物や通りなどの都市の具体的なありさまがテキス
トにリアルに盛り込まれている土地でもある。

大臣ジャウファルなどをお供に連れたカリフ、ハールーン・アル・ラシードが登場する
物語の多くはその治世（西暦786年・809年）においてではなく、はるかのちの10世紀
から12世紀にかけてバグダードおよびその周辺で、あるいはバグダード荒廃後、よその
土地で（とりわけエジプトで14世紀、さらには15世紀に）書かれたと考えられている¹¹⁴。

¹¹⁴ Cf. Gerhardt, *The Art of Story-Telling*, chap.6 (pp.419-470), esp. p.421. なお、ゲルハルトによれば、ハールーン物語群として50話ほどが数えられるという。

すなわちハールーンがほとんど架空の存在と化し、さらにはバグダードが今はなき栄華をほこった伝説の都と化したときにこそ、『千夜一夜』はこのカリフの物語を多く付け加えたのである。ここにも『千夜一夜』の「よそ」への志向が伺われる。『千夜一夜』の物語は、今はない遠い場所へと人々を誘う。そしてそうした「よそ」へのまなざしは、『千夜一夜』の場合、この物語集自身が経験してきた地理的な移動そのものへのまなざしと重なっている。[4a]「大臣ヌールッ・ディーンとシャムスッ・ディーンの物語」（別称「二人の大臣の物語」）のようにバスラとカイロ、あるいはシリアのダマスカスのあいだを瞬時に移動してしまうという内容をもつ物語も珍しくない。時間的な隔たりも超えて、カイロの屋敷からカリフ、ハールーンのいるバグダードへと移動する物語さえ『千夜一夜』にはみられる。[109]「カイロの商人アリーの物語（またはバグダードの妖怪屋敷）」（第 424～434 夜）では、カイロの豪商ハサンの息子アリーが、父が死んで受け継いだ莫大な遺産を蕩尽して一文無しになり、妻子も置いてふらりとバグダードにたどり着くという展開になっている。そこで借りるのが泊まった者は翌朝必ず死体となって発見されるという「妖怪屋敷」なのだが、アリーのもとにあらわれたのは父の秘宝を預かる魔神で、（まるで「アラジンと魔法のランプ」の魔神のごとく）アリーをバグダード随一の大金持ちにし、結局アリーは息子を王女と結婚させて幸せに暮らしたという物語である。バグダードはここで、^{いにしえ}「古」の栄華のもとにイメージされている。この物語では、地中海岸のカイロからはるか東のバグダードへという地理的移動と、「現在」の都市カイロからかつての都バグダードへの時間的移動に加え、現実的なカイロの市井から空想的なものが支配する想像上の都へという虚実の次元のあいだの移動が物語化されている。魔法によって富を得たアリーが、魔神に頼んでカイロ（現実世界）からバグダード（架空世界）へ妻子を連れてこさせるのも、この極限の異次元空間への移動のモチーフを強調しているだろう。

また『千夜一夜』という物語集全体も己自身の時空間の移動をそのまま物語化するテキストとみなすことができる。

シリアやエジプトで新しい物語が付け足されたり、またもとからある物語に加筆をほどこしたりして、『千夜一夜』は変容を続けてきた。マフディが 14 世紀のものと主張するガラン写本には、実は 15 世紀以降でなければ書き込めない要素も含まれている。1438 年に没した大物人物のものと思われるダマスカスの大邸宅の描写や、1425 年以降にマムルーク朝下の地域で流通したアシュラフィーという貨幣を使用する場面などである¹¹⁵。ここから

¹¹⁵ アーウィン『必携アラビアン・ナイト』、p.88。（「せむしの物語」の枝話）「ユダヤ人の医者のお話」に出てくるダマスカスの「ストゥーン・アブド・アッラフマーン」の大邸宅というのが正確にはストゥーン・ミン・アブド・アッラフマーンの誤記だと考えての推測。問題の貨幣

ガラン写本は 15 世紀のものだとされるが、マフディが根拠としたように 14 世紀頃と思われる痕跡も多く、14 世紀になされた物語の上にさらに 15 世紀の要素が多層的に付加されたとみることができる。また ZER には、鉄砲やコーヒーなどの比較的近代の要素が、それ以前から伝えられてきたと思われる物語のなかに挿入されている箇所がある。あとでもみるが、異なった時代を反映した要素がひとつの物語テキストの中に混淆的に存在することによって、少なくともテキストの読み手は、『千夜一夜』の物語がたどってきた時間のなかの長い旅を感じとることになる。地域的な多彩な要素についても同様である。『千夜一夜』は移動の痕跡が蓄積されていくテキストなのである。

『千夜一夜』は写本テキストをもとに、あるいは記憶をたよりに、職業的な物語師たちがカフェなどで口演をおこない民衆に親しまれてきた。しかし『千夜一夜』は、口演の演目としては次第にすたれ、『千夜一夜』自体がアラブ世界では忘れ去られてしまったらしい。17 世紀後半の計 20 年近くにわたった中東滞在のあいだにガランがこの物語を聞いたことがなかったこと、また彼が『千夜一夜』のうわさを聞いてこの写本を探させたが容易には手に入れることができなかつたことから『千夜一夜』の実質的消滅ないしは衰退が推察できる。また 19 世紀前半にカイロに滞在したレインの報告でも、『千夜一夜』が中近東やエジプトでほとんど忘れ去られていたことが証言されている。

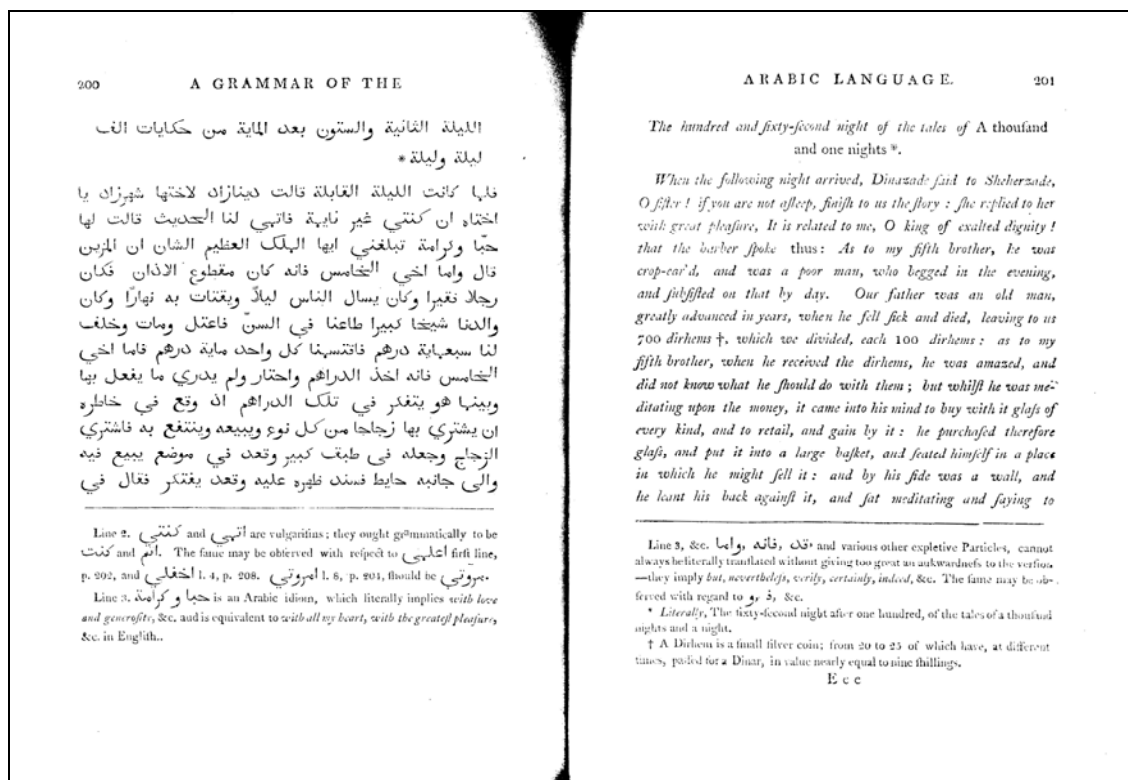
『千夜一夜』の次なる移動はむろんヨーロッパである。ガランの紹介後ヨーロッパでこれだけ『千夜一夜』がもてはやされ、多くのテキストがさまざまなかたちで生産されてきたかはすでにみたとおりである。18 世紀初め以降、『千夜一夜』はヨーロッパで新たな生成のチャンスを得、人々に読まれ、楽しまれる時代を迎えた。そして 18 世紀後半にはカイロで ZER の親写本が作られたとされる。これは単にアラブ世界内の『千夜一夜』熱の再燃ではなく、あきらかにヨーロッパとアラブ世界の交流によって起きた現象であろう。アラブ世界とヨーロッパ世界を接続した新たな場にこそ、この ZER は誕生し、またカイロ郊外ブーラクでの印刷本も制作された。カルカッタでの印刷本は、むしろヨーロッパ人（イギリス人）の東方へのまなざしが誕生させたものではあるが、カルカッタ第二版の出版経緯で若干触れたように、そのまなざしのなかには、現地の人々が自らの文化遺産として『千夜一夜』をみようとする視線がくみとられて（あるいは創出されて）いた。近代以降の『千夜一夜』は、西尾哲夫がその著書の副題としても掲げているとおり、アラブ世界とヨーロッパ世界との往還そのものが作り出したテキストとして存在してきたと言える。

したがって『千夜一夜』がヨーロッパにとって、その「オリエンタリズム」の中核を形成する作品であることは自明すぎるほどである。ヨーロッパ人からのアラブ人ないしは「オ

は、商業・交易の振興に功績のあったマムルーク朝第 12 代目スルタンのアル・アシュラフ・バルスバイ（在位 1422-38）治下で流通したもの。

リエント」世界にたいする戯画的なまなざしが、ヨーロッパで生産される『千夜一夜』のさまざまなヴァージョンに反映され、紙芝居や演劇、挿絵を含めさまざまなヴィジュアル・メディアを通じて、まさにオリエンタル「イメージ」を形作ってきた。『千夜一夜』という物語集が、その名も『アラビアン・ナイト』と改題されて普及し、ヨーロッパ人にとっての「アラブ世界」のイメージそのものを醸成する場とされてきたのである。ちなみに現在、世界的に（つまりヨーロッパ的規範が拡大された地球上の多くの諸地域において）この作品集は——少なくとも英語を用いる文脈においては——、『アラビアン・ナイト』 *Arabian Nights* という名称によって流通している。たとえば MLA（米国現代語学文学協会）の図書分類でも *Thousand and One Nights* というタイトルは、*Arabian Nights* という項目に回付されることになっている。専門研究書においても、英語圏では、*Arabian Nights* の方がよく用いられる。こうした流れを受けてか、日本でも『アラビアン・ナイト』の方が優勢であり、いまや『千夜一夜』は知らないが『アラビアン・ナイト』なら知っている、という一般読者も珍しくない。

『千夜一夜』が、ヨーロッパ人にとってもっとも身近なアラブ世界として存在していたことは、この作品集がアラビア語学習の教科書に採用されてきたことにも伺われる。『千夜一夜』のアラビア語テキストが、ほんの一部ではあるが、最初に印刷されたのは、1776年のことであった。「栄えある東インド会社の教材用」との副題を持つ『アラビア語文法』



リチャードソンの『アラビア語文法』、「せむしの物語」対訳の部分。1801年（第2版）より。

がジョン・リチャードソンによってロンドンで出版されている¹¹⁶。この文法教科書の末尾には、『千夜一夜』の162夜として、「せむしの物語」のなかの「理髪師の五番目の兄の話」が、アラビア語と英語の対訳のかたちで載せられている（なお、西洋を通じて中東世界を発見してきた日本においても、アラビア語学習が『千夜一夜』の原典テキスト講読というかたちをとって進められてきたことを杉田英明が検証している¹¹⁷）。

また、カルカッタ第一版（1814、1818）がやはり東インド会社の仕官たちがアラビア語を学習するための副読本として作られたことはすでに述べた。このように、東インド会社を通じたイギリスの植民地支配の基礎手段として『千夜一夜』が用いられたことは興味深い。イギリス人にとってアラビア語の世界といえば、何よりもまず『アラビアン・ナイト』こと『千夜一夜』を入り口とする世界と相場が決まっていた、こうした強力な通念がによって『千夜一夜』がアラビア語学習者ないしアラブ世界を知ろうとする者にとって、もっともなじみやすく、また当然最初に学習されるべきテキストとして特権化されてきたのである。そして、現地語の語学力というインドおよび中近東支配のための必須能力の醸成ために、大真面目で『千夜一夜』のテキストが学習対象とされたのである。かくして『千夜一夜』は、植民地支配の拡大と確立をめざすヨーロッパ世界において、アラビア語テキストの「正典」の位置を与えられることになったわけである（——ただしテキストの画定をみないままに）。

ヨーロッパ人による「東洋」蔑視としての「オリエンタリズム」が発揮される特権的な場としての『千夜一夜』については、論じようと思えば無数の材料があるだろうが、ここでは、この概念を初めて提示し、詳細に論究した淵源の著作エドワード・サイードの『オリエンタリズム』¹¹⁸と『千夜一夜』の関係に若干触れておきたい。『千夜一夜』に関心のある者がこの著作に触れたときにまず気づくのは、レイン、マクドナルドなど『千夜一夜』の出版や研究にかかわった西欧人の名がここに挙げられ、克明に論じられていることである。彼らはさまざまな活動を展開した東洋通の人間であり、また幅広い研究領域をかかえ

¹¹⁶ John Richardson, *A Grammar of the Arabic Language, In which Rules are Illustrated by Authorities from the Best Writers; Principally adapted for the Service of the Honourable East India Company*, (1776), 1801. リチャードソンは、ガランの用いたのとは別の（やはりシリア系の）写本を用いたらしい。

¹¹⁷ 杉田英明『『アラビアン・ナイト』原典講読事始——昭和前期におけるアラビア語研究の先達たち』、『東洋文化』第87号、東洋学会・東京大学東洋文化研究所、2007年、pp.205-225。またこの論文の前駆的論文（「語学教材としての『アラビアン・ナイト』——明治～昭和前期を中心に」、『ODYSSEUS』第11号、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻、2007年、pp.1-31）では、『千夜一夜』が西欧語学習の窓口としてさかんに用いられたことが検証されている）。

¹¹⁸ Edward Said, *Orientalism*, Pantheon Books, 1978（邦訳、エドワード・サイード『オリエンタリズム』今沢紀子訳（板垣雄三、杉田英明監修）、平凡社、1986年【平凡社ライブラリー（上・下巻）、1993年】）。

る偉大な東洋学者たちであったが、そのなかでも彼らが『千夜一夜』に関連しておこなった活動は、彼らの生涯のなかでもきわめて重要な部分を占めていたと言っても過言ではないだろう。サイドは、こうした^{オリエンタリスト}東洋学者たちが、いかに「オリエント」蔑視の見方を規範化し根付かせた「^{オリエンタリスト}東洋蔑視者」であったか、あるいはすくなくとも「^{オリエンタリズム}東洋蔑視」の学問的基盤をはからずも、だが確実に提供してしまったかを詳細に明かしていく。西欧において、また西欧に追随するさまざまな地域において、「オリエンタリズム」の装置として機能してきた『千夜一夜』は、この不幸な意味においても、やはり異なる世界どうしが出会う精神的な境界地帯を形成してきた。

むすび——変貌し続ける「作品」

神秘的な力をもつ聡明なシェエラザード(ときに妖婦としてイメージされることもある)、勇気あふれるアラジン、賢明なアリババ、冒険家シンドバード、悪徳大臣のジャウファルそして邪悪なジンたちといったように、ヨーロッパでは『千夜一夜』のなかの何人かの特に注目されるキャラクターがスター化され、しばしばもとの物語にはなかった新たな性格づけを伴って、広く人々に親しまれるようになった。もはや『千夜一夜』という枠を離れて、誰もが知っている文化的共有物としてこうしたキャラクターたちや、空飛ぶじゅうたん、魔法のランプなどの「パーツ」素材¹¹⁹が、実に多様な文化領域のさまざまな文脈のもとでおおいに活用されるようになった。『千夜一夜』は、さまざまな子供向けの娯楽(絵本、芝居、漫画、アニメ、玩具など)や、逆に「大人向け」の娯楽(艶書、猥画、ポルノ映画、果ては性産業の店舗など)を派生生産してきた。そしてこうした西欧での特異な発展の仕方は、アラブ世界にも逆輸入されるようになった。現在では、アラブ世界でも、冒険心にあふれる「船乗り」のシンドバードが活躍する物語や、黒服の悪大臣が登場したり、主人公が空飛ぶじゅうたんで好きな場所に移動したりする物語、あるいは、(アラブ世界では写本が存在せず、主な校訂版印刷本にも存在しない)アラジンやアリババの物語が、アラビア語の絵本や児童書で人気の素材となっている。『千夜一夜』は東西を往還する移動の果てに、アラブ世界においても、近代までにはなかった性格をまとうようになったのである。

『千夜一夜』はもともと「^{アズィズ}不可思議」な、つまりは空想的な物語を集めたもので、しかもつねに読み手や聴き手にとって遠い世界、知らない世界、異なる世界を浮かび上がらせそこへと誘うものとしてあった。『千夜一夜』はひとの心を未知の世界へと向かわせる。同

¹¹⁹ 西尾『アラビアンナイト』、p.189 以下、および山中由里子「娯楽産業とアラビアンナイト」、『アラビアンナイト博物館』、p.105 を参照。

時に『千夜一夜』自体が未知の世界、異なる世界へと場所を移し、この移動にしたがって姿を変容させる。まさに『千夜一夜』は、一箇所に停止することがなく、一つの状態に固着することのない、移動しつづける作品なのである。つまり自らの「アイデンティティ」に閉じこもることのない、たえず外部へと開かれた奇妙な——特個的な——作品である。類例のないほど特殊な成り立ちをもつこの特個的な“作品”は、それ自体が移動し、変貌し続けることによって自他の境界を越え、存在のしかたを壊乱させることを本質的な性質とする。この意味で『千夜一夜』は、本質的に可変的な「作品」（もはや「作品」とは呼べないようななものかであるが）であり、特個性が特個性に閉じることのないある種の永久運動を本来的に内包していると言うことができるだろう。